
海風の吹く場所

池崎 数也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

海風の吹く場所

【Nコード】

N3097E

【作者名】

池崎 数也

【あらすじ】

生きる目的もなく、ただ日々を過ごす男子高校生藤岡修司。そんな修司だが、ある日一人の少女と出会う。今まで出会ったことのないタイプの少女に、困惑と興味を覚える。繰り返し会うことに、修司は自身が変わっていくのを感じた。そんな、夏の物語。

プロローグ：夏のはじまり（前書き）

この物語に登場するとあるキャラクターは、拙作の「あの日見上げた青空に」に登場するキャラと性格などが酷似しています。元々はこちらが原型となっていますが、ご注意ください。

プロローグ：夏のはじまり

波の音が聞こえる病室で、一人の少女がベッドに背を預けていた。窓の外へと目を向けて、ぼんやりと外を眺める。だが、ぼんやりとしているようでその目には強い意志が宿っていた。

コンコン、とノックの音が響く。

少女は、はい、と返事をした。

それに遅れること数秒、病室の扉が開く。そして、開かれた扉に続くように人が入ってきた。

真っ白な白衣を着た、中年の男性。おそらくは医師だろう。

その後ろには、看護師と少女の母親らしき人物が一緒にいた。しかし、母親の表情は硬い。

少女はそんな母親の表情に何かを感じたのだろう。ベッドから身を起こし、真っ直ぐに母親を見る。

そんな少女に、医師が一步前へと出た。そのまま、何かを伝えるために口を開く。

「――」
少女は医師の言葉を聞き、僅かに目を伏せた。だが、すぐさま顔を上げて――柔らかに微笑む。

その笑みを見た医師は、歯を食いしばって頷いた。ただ、悔しそうに握られた拳がやけに痛々しい。

医師は少女に小さく頭を下げ、病室を後にする。

そんな医師に続くように、看護師も病室から外へと歩み出た。ただ、母親だけは少女の傍に腰を下ろす。だが、母親は少女を見ることができなかった。小さく肩を震わせ、押し殺したように泣き声を上げる。

少女は困ったように母親に小さく笑いかけ、こう告げた。

『わたしは負けない。生きてみせるよ』
と。

そう告げて、少女は窓の外を見る。
晴れた青空の下では、桜の花が舞っていた。

初夏も近づいたこの時期は、気温もずいぶんと上がるようになってきている。蝉も鳴き始め、そろそろ夏の到来を感じさせた。

「ま、その代わり暑いがな」

俺はそんなことを呟きながら、窓の外へと目を向ける。

グラウンドには朝練を終えた運動部の姿がちらほらと見え、校門では急ぎ足で生徒が通り抜けていく。

窓から吹き込んでくる風を吸い込み、俺は肩の力を抜いた。

「……夏だな」

風についた磯の香りに、俺は遠くへと目を向ける。校舎の二階から見ることでできる範囲でも、視界の三割は海によって占められていた。

「ふう……」

ため息を吐く。すると、不意に肩を叩かれた。

「よお、藤岡。朝からため息なんて吐くなよ。幸福が逃げちまうぜ？」

背中にそんな声をかけられ、俺は気だるく振り向く。

そこに立っていたのは一人の男子生徒。

身長は百七十五センチ程度で俺と同じくらい。俗にいうスポーツ刈りの髪型に、気さくそうな顔をしている。名前は畑山健吾と言って、このクラスの中では親しい部類に入る人間だ。

「そんなことで幸福が逃げるのなら、今頃俺は車に撥ねられて死んでいる」

「ははっ、そりゃそうだ」

畑山は俺の言葉に軽く笑い、隣の席へと腰を下ろす。俺はそれに構わず、再び窓の外へと目を向けた。

「しつつかし、最近暑いよな」

「そうだな」

畑山の言葉に、適当に答える。

「あれか？ 地球温暖化の影響ってやつか？」

「だろうな」

畑山の言葉を、おざなりに返す。

「俺に対するお前の態度は、地球温暖化に比例するみたいに冷たくなってきたよな」

「かもな」

「……OK、表に出ろ。俺は出ないから」

「暑いから断る」

そう言って、顔を見合わせる。そして、互いに笑い出した。

畑山は豪快に笑い、俺は軽く笑う。

「いや、相変わらず良い性格してんなお前」

「知らねえよ、そんなこと」

笑いを苦笑に変え、再度窓の外へと目を向ける。だが、畑山は喋り足りないらしく、俺の肩を突いてきた。

「なあ、お前も何か部活に入らね？」

脈絡もない話。しかし、俺とこいつの間では時折交わされる会話だ。

「なんでだ？」

「だって、お前運動神経良いじゃねーか。勿体ないって」

畑山の言葉に、俺は椅子に背もたれる。

「とは言っても、やる気が出ない」

「出せよ。部活に入っていたほうが内申点も良くなるし、な？」

なにが、な？ なのかは知らないが、俺は首を横に振った。

「別に、内申点に興味はない。それに、二年の今から入ってどうする」

「んー……そこはほら、運動不足の解消とか？」

「授業の体育だけで十分だ」

ばつさりと切り捨てて、俺は一つ欠伸をする。それを見て、畑山はやれやれと肩を竦めた。

「本当に相変わらずだな。ま、俺も無理にとは言わないけど……」
そこで一旦言葉を区切り、畑山は真剣な目へと変わる。

「お前さ、将来とかどうするんだ？」

教師みたいなことを言うな、と内心で思うが、これもこいつの良ところなのだろう。真剣に他人を心配できるこいつが、少しばかり羨ましい。

「——さあな」

だが、それに応えることはできそうにない。

俺の答えに畑山は苦笑して、椅子から立ち上がる。

「まあ、そこもお前らしいと言えはお前らしいけどな。だけど、そろそろ進路のこととも考えとかなないといけないぜ？」

「わかつてる……サンキュな」

「良いってことよ。そんじゃ、そろそろ席に戻るわ」

畑山がそう言ったのと同時に、教室の扉が開く。そして、担任の教師が入ってきた。そのまま教室を見渡し、頷く。

「よし、遅刻はいないな。出席を取るぞー」

そんなことを言いながら壇上へと上がり、出席簿を開く。

「青木」

担任の声をBGMに、俺は雲一つない夏空を見上げた。

「将来をどうするか……」

言われたことを反芻し、目を瞑る。

——そんなこと、俺自身が知りたかった。

俺が通うこの学校は、至って普通の県立高校である。

有名な進学校というわけでもなければ、スポーツが盛んというわけでもない。本当に、至って普通の学校だった。

特に目標のない地元の中学生なら、そのまま進学するであろう高校。俺も、その中の一人だ。

特に目標や夢があるわけではなく、勉強も多少はできるが有名な大学に進学する気もない。自宅から近いという理由で進学したくらいだ。

そもそも、中学生の時点で確固たる目標を持っている者などあまりいないだろう。大抵は流されるままに日々を送り、高校生の中盤以降に自分の道を模索する。

まあ、俺の場合はそれがより顕著なだけだ。

定期試験である程度の点数が取れて、授業もサボらない。それだけをこなしていれば、ある程度の道は開けるだろう。

普通の大学に進学し、普通の会社に就職する。そんな、大多数の人間が歩む人生。

——それが、ひどく色褪せたものに見えた。

そして、それ以来どうにもやる気というものが出ない。

やっても無駄だ、意味がない。そんな考えが浮かんでしまう。詰まるところ、最終的にはある結論に行き着くんだ。

「俺、なんのために生きてるんだろうな」

呟きは小さく、誰にも聞かれることはない。

「藤岡」

そして、そんな思考を遮るように担任の声が響く。

「……はい」

おざなりな返事をして、俺は頬杖を突いた。

何にせよ、人は生きていかなくてはならない。例えそれが、流されるままの人生だとしても。

そんな俺の考えを嘲笑うかのように、傍の木で蝉が鳴いた。

一章：海風と少女

学校のない休日。俺は目覚ましの音で目を覚ました。耳元で元気に鳴り響く目覚ましを叩いて黙らせ、欠伸をする。

寝ていたとき暑かったせいか、大分汗をかいていた。額に浮いた汗を軽く拭い、俺は寝汗を吸い込んだシャツを脱ぐ。そして、タンズから新しいシャツを出して着替えた。

「ふう……」

それだけでも大分さっぱりした気がする。

俺はそのまま立ち上がり、部屋の外へと足を向けた。まずは、顔を洗って完全に目を覚まさなくてはならない。

自室を出て、階下へ降りて洗面所へと向かう。そして、少し冷たい水で顔を洗った。

夏場の水というのは朝のうちはそれなりに冷たいが、昼間になると温くなるのはどうしたものか。

そんなどうでもいいことを考えながら、リビングへと入る。しかし、そこに両親の姿はなかった。テーブルの上に目を向けてみれば、なにやら紙が一枚置いてある。俺はそれを手に取り、文面に目を通した。

それによると、どうやら親戚の家に行ってくるらしい。俺は一つ頷いて、その紙を丸めてゴミ箱へと投げる。

親戚の家に行くなんて、俺にとってはどうでもいい。両親もそこをわかっているのか、俺を連れて行かなかったのだらう。まあ、今は十時を過ぎているから放っておいただけということもあるのだが。テーブルの上には朝食と昼食が用意されている。俺はテーブル脇にある椅子に腰を下ろし、とりあえず朝食を食べることにした。

午前中は、面倒だが宿題でも片付けるとしよう。宿題なんぞ、夏

休みにまとめて出してほしい。

午後からは、釣りにでも行こう。俺はそう決めて、先ほど丸めた紙を投げたゴミ箱に目を向ける。

残念ながら、シユートは決まらなかったみたいだ。

海風が吹き付ける堤防を歩きながら、俺はため息を一つ吐く。

空は晴れ渡る快晴。雲一つない青空は、これでもかと言わんばかりに直射日光を振りまいている。

午前中は宣言通り宿題を終わらせ、昼食を食べてから外へと出てきた。

「あちい……」

ため息に続いて愚痴を一つ吐き、堤防を歩く。

そろそろ夏休みも近いせいか、遠くの砂浜ではちらほらと家族連れの姿が見えた。

いつか俺も泳ぎに行くのもいいかな、なんて考えながら、影の差している場所へと移動する。そして、腰を下ろしてバッグからコンパクトロッドを取り出した。

小型ながらもリールの装着できるそれは、携帯用の釣り竿として重宝するものだ。

俺は手早く仕掛けを作ると、餌を釣り針につけて海中へと投じた。しかし、俺は海を見ながらぼんやりとするのが好きだけで、釣りはそこまで好きではない。だが、ただ海を眺めているだけというのも勿体なくて、釣り竿を握っている。さすがに、何も持っていない人間がただ海を見ているだけというのは人に見られたら不審の目を向けられてしまうだろう。

一定のリズムで響く波の音を聞きながら、俺は海面に目を向けた。波打つ海水に日光が反射して、少し眩しい。俺は僅かに目を細め、そのまま水平線へと視線を移す。

「今日も、良い風だな」

頬を撫でる海風に、俺は小さく笑う。

磯の臭いが駄目とか、海の風に含まれた塩分が嫌だ、なんてよく聞くけれど、俺は気にしない。

爽やかさのない風だが、俺にとってはこちらのほうが好ましかった。

海面に浮いたウキが、ぴくりと動く。数回小刻みに揺れると、そのまま海中へと姿を消した。

「今日は早いな……」

そう言っ、俺は竿を引く。すると、竿先がしなっ、魚がかかったことを知らせた。

俺はリールを回し、魚を引き寄せる。大きな魚ではないのだろう。抵抗はあまりなく、簡単に引き寄せることができた。

「っ、ちっさいなオイ」

水面から顔を覗かせたのは、全長十センチにも満たない小魚。俺はその小ささに苦笑を浮かべ、一息に魚を引き上げる。

背びれなどの毒がない魚であることを確認し、針を外す。すると、アスファルトの上で元気良く跳ね回った。

「慌てんな慌てんな」

このまま置いていても日干しになるだけなので、すぐさま海へと帰してやる。俺は、小魚をなるべく優しく海面へと放った。

ぽちゃん、という音と共に、小魚の姿が消える。俺はそれを見送り、

「——釣れますか？」

そんな声に、顔を上げた。

「今、一匹釣れたところだ」

とりあえずそう答えながら、声の主を見上げる。そこにいたのは、一人の少女だった。

黒の長髪に優しい面差し。目は柔和な印象を受ける。白のワンピースに身を包み、海風に飛ばされそうな白い帽子を右手で押さえ

ていた。

年齢は、おそらく俺と同じか一つ下ぐらい。
誰だろう？

声をかけられたから答えたが、俺はこの少女を知らない。同じ学校の生徒にしては見かけない顔だし、近所にこんな子が住んでいた記憶もない。

すなわち、赤の他人だった。

「隣、座つても良いですか？」

そんなことを考えている俺に構わず、少女がそんなことを聞いてくる。俺は僅かに黙考し、頷いた。

「別に俺の席つてわけでもないし、構わないぞ」

俺がそう言っていると、少女は僅かに距離を開けて座る。そして、笑顔で空を仰ぎ見た。

「良い天気ですねー」

帽子を押さえながら、日光に目を細める少女。俺はそんな少女から、海面へと視線を移した。

「まあ、夏だからな」

適当に答える。しかし、少女は構わず話を続けた。

「わたし、海って好きなんですよね。海の風と波の音って、落ち着きますから」

「……それは、海が好きなんじゃなくて、海の風と波の音が好きなんじゃないか？」

「あははは、そうかもしれませんね」

楽しそうに、少女が笑う。俺は頬を掻き、さっきから気になっていたことを尋ねることにした。

「なあ、どこかで会ったことあったっけ？ 俺、君のことを知らないんだけど」

すると、少女が今度はクスクスと笑い出す。

「それは奇遇ですね。わたしも、あなたのことを知りませんから」

「……………」

思わず沈黙する。いや、どう反応すればいいのか全くわからなかった。

「そうか」

「ええ、そうです」

それだけを返すと、俺は再び海面のウキへと目を向ける。

この少女が誰かは知らない。けれど、何故か気にならなかった。

普通、他人が真横に座っていたら嫌でも気になるものだが、この少女にはそれがない。

俺はそのことに疑問を覚えるが、どうでもいいか、と考えることを放棄した。

「釣り、好きなんですか？」

海を眺めながら、少女が尋ねてくる。

「んー……釣りが好きというより、ここで風に当たっているのが好きって言ったほうが正しいな」

軽く竿を動かしながら、そう答えた。すると、少女は笑みを浮かべたままで再度尋ねてくる。

「なんで、ここで風に当たるのが好きなんですか？」

「さて、ね。俺にもよくわからんよ」

「そうなんですか？」

ああ、頷く。少女は俺の言葉に首をかしげると、左腕にはめられた小さな腕時計を見て声を上げた。

「あ、そろそろ戻らないと……それじゃあ、失礼しますね」

「ああ。じゃあな」

右手を軽く振る。すると、少女はもう一度笑って立ち上がった。

そして、来たときと同じように帽子を押さえながら歩き去る。

俺は小さくなっていく背中を見ながら、一人呟く。

「……一体、誰だったんだろうな」

その問いに、答えてくれるものはいなかった。

「きりーつ。きをつけー、礼」

日直のおざなりな挨拶を先頭に、担任の教師に頭を下げる。担任はそれに頷いて応え、足早に教壇から去っていった。

「ふう……」

ため息を吐く。今日は午後からの授業がない。そのため、生徒は昼で帰ることができる。

部活動をしている人間は別だが、俺はどこの部にも所属していないから関係なかった。

「あれ、藤岡帰んのか？」

俺が帰り支度をしていると、畑山が声をかけてくる。俺は鞆に教科書を詰めながら、そちらに目を向けた。

「部活にも入ってないしな。さつさと帰ることにする」

「羨ましいな、おい。俺はこれからずっと部活だぜ」

畑山はうんざりした表情でそう言つと、手に持ったバグを掲げる。刺繍された文字を見る限り、野球部のようだった。

「今時熱血は流行らないと思うんだけど、どうよ？」

「さて、な。そもそも、野球部という時点で熱血だと思うぞ」

うへえ、なんて声を漏らす畑山の肩を叩き、俺は教室を後にする。熱血なんて俺の柄じゃないが、それを応援するくらいはしてやるさ。

午後から、俺は釣り場へと足を向けた。徒歩で十五分程度。自転車を使えばもっと早く着くのだが、散歩を兼ねているからいつも徒歩で向かう。

木にとまった蝉が鳴き、それに合わせるように他の蝉が合唱する。俺はその音量の大きさに、意味もなく夏だなと思った。

日差しも相変わらずキツイが、夏だからと我慢する。これで凍るような寒さだったら、異常気象もいいところだろう。

益体もないことを考えながら、堤防を歩いていく。蝉の鳴き声に波の音が唱和され、俺は本当に夏だな、と思った。

海に目を向けて、水平線を見る。しかし、日差しの反射のせいで

よく見えない。その反射の間を縫うようにして、ウミネコが滑空していた。

「ああ、夏だな……」

今度は口に出してみる。これでスイカでもあれば完璧だったのだが、と周りを見回すけれど、当然そんなものはなかった。

俺は、日光のせいで陽炎が立ち上りそうなコンクリートの上を歩く。靴の底が溶けてないだろうな、と靴底を見るが異常はない。

そうやって、いつもの場所へとたどり着く。少しばかりだが影ができていたので、俺はそこに腰を下ろした。直射日光が当たる場所に比べると、十分涼しいと言えるだろう。

まったくの余談だが、ニュースなどで言っている最高気温は日陰で測った温度のことを指すらしい。百葉箱のようなもので測るのだから、当然と言えば当然なのだが。

バッグを開け、中からコンパクトロッドを取り出す。以前釣具屋のバーゲンで買った物だが、十分に役目を果たしてくれている。しかし、ずっと潮風を浴びているから手入れもしなければならぬのだが。

欠伸を一つ吐き出して、リールをセットする。そして、仕掛けを繋げてから海面へと投じた。

水滴が落ちるような気の抜けた音と共に、餌が海中に沈んで見えなくなる。満潮の関係か、いつもよりも水位が高いようだ。

「ま、正直どうでもいいけどな……」

正直、釣りは二の次だ。ここにくる目的は、考え事をするため。部屋の中で考え事をするのも良いが、それだと他のことに気をとられるから好きではなかった。

俺は止めどなく流れる思考をそのままに、海面から正面へと顔を上げる。その拍子に海風が吹きつけ、俺は僅かに頬を緩めた。

やはりというべきか、落ち着く。

別に、海に思い入れがあるわけではない。両親が漁師で、子供の頃からよく船に乗っていた、なんてこともない。ただ、理由もなく

落ち着くのだ。

そして、俺は様々なことを考える。

これからの先のことと、その意味。

「意味は……ねえよな」

それは考えることに對して言ったのか、それとも未来を生きることに對して言ったのか俺にもわからない。ただ、無意味だなと思っただけ。

手元で釣り竿が震え、俺は反射的に釣り竿を立てる。すると、それに抵抗するように竿の先がしなった。

海面を見ていなかったから、魚が餌を突いていたことに気づかなかった。それでもなんとか魚の口に針がかかったらしく、水面下で魚が暴れている。抵抗の大きさからして、少しはサイズがあるみたいだ。

「暴れるな暴れるな、っと」

リールを巻き、自分のほうへと引き寄せる。魚の泳ぐ方向と逆に竿を引き、魚を疲れさせるようにしながら巻き上げていった。そして、かかった魚が海面に顔を出す。

全長は20センチほどで、少し形が面白い。何が面白いかというと、魚の顔が馬のような顔だったからだ。

「ウマヅラハギか。こんな場所でも釣れるんだな……」

思わぬ収穫に、俺は感嘆のため息を吐いた。

収穫とは言っても、バケツもないので持って帰るわけにもいかない。元々食べる目的もないし、キャッチ&リリースだ。

いつそ円盤投げのように投げてやろうかとも思ったが、それをするとう魚が死にそうなのでやめておく。

今座っている場所から、2メートルほど下はすでに海だ。普通に放すだけで、魚は無事海へと帰れるだろう。勿論、叩きつけるなんてことはしない。なるべく優しく、水面へと放してやる。

「ほら、もう釣られるんじゃないぞ」

釣った本人の言うことではないが、一応そんなことを言うておく。

魚はそれに応えるように、水しぶきを上げながら海中へと戻った。

そして、新しい餌を釣り針につけようと手を伸ばし、

「お魚、逃がしちゃうんですか？」

以前のようにかけられた声に、手を止める。だが、すぐさま釣り針に手を伸ばして餌をつけた。

「まあ、食べるのが目的じゃないからな」

俺がそう言うと、笑ったような気配が伝わってくる。俺が斜め後ろに顔を向けると、数日前にも声をかけてきた少女がいた。

「こんにちは」

そう挨拶しながら、頭に被った白の帽子が海風に飛ばされないよう押さえつつ、少女が軽く頭を下げる。

「ああ、こんにちは」

俺もそれに倣って挨拶を返した。すると、少女は俺の隣へと移動する。

「隣に座ってもいいですか？」

「……前も言っただろう。別に俺の席でもないんだから、好きに座ってくれ」

では失礼して、と少女が呟き、腰を下ろす。

俺はそれを横目に見ながら、餌をつけた釣り針を海面へと放つた。すると、小さな着水音と共に釣り針が海中へと姿を消す。そして、海面に浮くウキだけが残った。

そんな俺の動作を見ていた少女は、帽子を押さえながら視線を前へと向ける。

「夏ですね……」

ポツリと、そんなことを呟く。俺はその言葉に、小さく笑った。どうしたんですか？」

突然笑った俺を不思議に思っただのか、少女が聞いてくる。

「いや、俺もさっき同じようなことを言ったからつい、な」

「そうなんですか？」

「ああ」

そこで会話が途切れた。俺は海面に浮くウキを見て、少女は空を見上げる。会話はないが、別に気にすることもない。

そんな中で、海面に浮いたウキがピクリと動く。海面に小さな波紋が広がり、それが数回続いた。

そして、いきなりウキが海面へと引きずり込まれる。俺はそれに合わせて、釣り竿を引いた。

「かかったんですか？」

いつの間にか俺の動きを見ていた少女に、俺は頷き返す。

「かかった。しかも、少し大きめのやつだな」

手に伝わってくる手ごたえから、少しばかり大きな魚であることがわかる。

俺はリールを巻きながら、魚が泳ぐのとは逆方向に竿を引く。それを数回繰り返すと、魚が疲れたのかあまり抵抗なく引き寄せることができるようになった。

釣り糸をつかみ、そのまま引き上げる。すると、そこには三十七センチほどの魚がかかっていた。

「これ……なんですか？」

その魚を見ながら、少女が聞いてくる。

「これはアジだな。しかし、こんなところで釣れるとは……」

魚の口から釣り針を外し、海へと帰す。すると、それを見ていた少女が口を開いた。

「思いつきり投げたりしないんですか？」

「……俺がそんな人間に見えるのか？」

「いえ、聞いてみただけです」

笑顔をそんなことを言ってくる。思ったよりも、良い性格をしているらしい。

俺は釣り針に餌をつけながら、少女に尋ねる。

「ところで、質問なんだが」

「はい？」

「アンタは、この近くに家があるのか？」

「えっと、なんですか？」

「いや、歩きでここに来るくらいだ。近くに家があつて、そこから散歩がてら来ているのかと思つてな」

そんな俺の質問に、少女は困つたような笑みを浮かべた。俺はそれを見て、軽く右手を振る。

「いや、別に答えなくていい。なんとなく聞きたかつただけだ」

しかし、俺がそう言うのと少女は首を横に振つた。

「家……ではないです。ほら、後ろを見てください」

少女にそう言われ、俺は後ろを見る。しかし、後ろには防波堤の壁があるだけだ。

「あ、違います。そつちじゃなくて、もう少し上を見てください」

俺はそのまま顔を上げる。すると、なにやら建物が見えた。

おそらく五階建てか六階建てぐらいだろう。少し離れた場所に建っているが、そのくらいはわかる。

「……なんだ、あれは？」

長くここで釣りをしてきたが、あんなものが後ろにあつたとは気づかなかつた。

「あれは病院です。利用したことないんですか？」

「いや、子供の頃から病気の類にかつたことがほとんどないからな」

思い返してみるが、病気になつた記憶はほとんどなかつた。さすがに軽い風邪くらいはあるが、学校を休むほどでもなく、夜にぐっすりと眠れば翌日には治っているようなものばかりだ。だから、自然と病院を利用することもなかつた。

「健康で何よりです。病気は、かからないのが一番ですから」

少女が笑う。ただ、その笑いが今までと少しばかり違うように見えたのは俺の勘違いだろうか。だが、少女はすぐにさっきまでと同じ笑顔になる。

「さっきの質問ですけど、答えはあの病院にあります」

「病院？　なんだ、入院でもしているのか？」

俺がそう言うと、少女は頷いた。

「入院もしたことありますけど、あの病院にはよくお世話になるんです。あ、あそこの部屋を見てください」

少女が病院の一角を指差す。俺はそれを目で追った。

「わたしが入院すると、大抵あそこの部屋になるんですよ。それで、窓から外を見るとここがよく見えるんです」

その言葉に、俺はなるほどと頷く。たしかに、あそこからならこの場所がよく見えるだろう。だが、それだと気になることがある。

「……もしかして、入院患者か？」

そんな俺の質問に、少女は笑顔で答えた。

「はい。散歩をしたいので抜け出してきました」

「……………」

俺は思わず、頭上の青空を仰ぎ見る。

「抜け出して、いいのか？」

とりあえず聞いてみる。すると、少女は首をかしげた。

「駄目なんじゃないでしょうか？」

「……なら、抜け出すなよ」

俺がそう言うと、少女は抗議するように声を上げる。

「そうは言いますが、病院の中ってつまらないんですよ。だから、散歩くらい良いじゃないですか」

まあ、散歩するために病院を抜け出せるくらいだ。そこまで酷い病気を抱えているわけではないのだろう。

そんなことを考えていると、少女が僅かに笑みを引っ込める。

「それに、以前から気になっていたんです」

「気になっていた？」

「ええ」

一つ頷いて、少女はどこか遠くを見るように目を細めた。

「あなたは、よくここに来ますよね。いつも釣り竿を持って、この場所に座って。でも遠くから見ているなら、あなたは釣りをするためにこの場所に来ているんじゃないって思えたんです」

そのまま遠くを見つめながら、少女は言葉を続ける。

「さつき、病室からこの場所がよく見えるって言いましたよね？」

「ああ、言ったな」

俺が返事を返すと、少女は苦笑した。

「病室つて、本当にすることがないんです。だから、わたしは本を読んだり、窓の外の景色を眺めたりすることしかできませんでした」

「……そうか」

「はい。それで、よくこの場所にくるあなたが何をしているのか、気になってきちゃいました」

そう言つて、少女は笑う。

俺はその笑顔に、ふっと肩の力が抜けた。

「アンタ、馬鹿だな」

「あ、それは酷いです」

俺の言葉に、少女が頬を膨らませる。しかし、左腕の小さな腕時計を見てその表情を苦笑へと変えた。

「あ、そろそろ戻らないと。看護師さんが見回りに来るんですよ」
埃を叩いて少女が立ち上がる。そんな少女に、俺は声をかけた。

「今は看護婦ではなく、看護師というらしいぞ？」

俺の言葉に、少女は笑って立ち去った。

それ以降、この変わった少女は時折この釣り場へと姿を見せるようになった。

休日、何もなかったら大抵俺はこの場所に来る。しかも、もうすぐ夏休みだからその頻度も増すだろう。だが、それに合わせてこの少女とのエンカウト率が高くなっているのはどうしたものか。

「なあ」

俺は、隣に腰をかけている少女へと声をかける。

流石に夏場は暑いので、一応帽子をかぶってはいるが、日差しが当たらない影の部分に腰を下ろしているのだから意味はないのかもしれない。

「なんですか？」

手に持っていた本から顔を上げ、少女は首をかしげる。それに合わせるように黒の長髪が揺れ、ついでとばかりに頭の白い帽子も揺れた。

「お前さ、暇なのか？」

俺の質問に、少女は心外だと言わんばかりに首を振る。

「暇じゃないですよ。現に、こうやって本を読んでいるじゃないですか」

「いや、本なら自宅で読めば良いだろう。何も、こんな場所で読む必要はないはずだ」

誰が好んでこんな暑い場所で本を読むというのだろうか。もっとも、その暑い場所で釣りをしている俺に言える台詞ではないが。

「海からの風が当たって、気持ち良い場所じゃないですか」

「風は風でも、熱風だけだな」

「あ、これは一本取られましたね」

何がおかしいのか、少女はくすくすと笑う。俺はそんな少女から視線を外し、ウキの浮かぶ海面へと向けた。

「でも、それならなんで貴方はここに来ているんですか？」

横からの問いに、俺は手に持った物を軽く叩く。

「なんでも何も、釣りをするために決まっているだろ。あとは風に当たるためだ」

「でも、釣りをするためなら他に良い場所があるんじゃないですか？」

「……………」

少女からの返答に、俺は言葉を返すことができない。

たしかに、釣りをするだけなら他に良い場所があるだろう。釣れるポイントというのは様々ある。

まあ、こいつの言うとおり、この場所は『魚を釣る』ということには向いていないだろう。

別に隠すようなことでもないの、俺は海面を眺めたままで、答

えを口にする。

「……考え事をするためだ」

視線を滑らせ、遠くへと目を向けた。

遠くではカモメが気楽そうに飛び回り、その下では魚が水面を跳ねる。俺はその光景を見ながら、肩の力を抜いた。

「あんたと同じで、海の風が好きなんだ。だから、落ち着いて考え事ができる」

「……そうですね」

落ち着いた声。ちらりと横を見てみれば、少女も俺と同じように、遠い場所を飛ぶカモメを目で追っていた。

「どんな考え事をしているのか……聞いても良いですか？」

視線を合わせることはない。ただ、お互いに前を向くだけだ。

「別に大したことじゃない。今の、自分の境遇に関して考えたいだけだ」

「今の境遇、ですか？」

見たわけではないが、きっと首をかしげているだろう。自分で言うておいてなんだが、俺自身それで合っているか自信はない。

「そうだな……進路とか、将来とか。そんな、ありがちなことだ」

「将来に関して考えていたんですか？」

「一応は、な」

海面のウキが一度動く。俺はそれを無感動に眺めながら、話を続けた。

「一応、ですか」

「そう、一応だ。将来と言っても、あんたが考えているようなことじゃないだろうよ」

俺の言葉に、少女は目を瞬かせる。

「将来はどの学校に進学する、とか。どの会社に就職する、とかじゃないんですか？」

「違う。俺が考えていたのは、それに意味があるかってことだ」

首をかしげる少女に、俺は微かに笑う。

「考えてもみるよ。人間、どんな道を歩んだって行き着く先は同じなんだぜ？　なら、どんな道を歩んでも同じだろ。だから、将来とか馬鹿らしいって思えてな」

それは、人間誰しも考えることだ。しかし、そんなことを言っても人は生きていかなければならない。例えそれが、最終的に皆同じ結末になるのだとしても。

「面倒なことだが、これから就職なり進学なりしないといけない。しかし、それらは生きていく上で必要なことだ。そして、俺にはそれらが必要最低限のことだとしか認識できない」

俺がそう言つと、少女は笑う。だがいつもとは少し違つ、どこか不思議なものを見るかのような笑顔で、

「——貴方は、生きるのがつまらないんですね」

そんなことを、言った。

「つまらない？」

「そうです。たしかに、生きるというのは面倒なことなのかもしれませんが。嫌なこともあれば、楽しいこともあるでしょう」

少女の話に、俺は耳を傾ける。

「ですが、それは誰だって同じことですよ。それを放棄するのは、ただの甘えです」

それだけを言つと、少女は立ち上がった。

「でも、これだけは覚えていてください」

そして、笑みを消して真剣な表情で俺を見る。

「そんな面倒でつまらない生活でも、渴望してやまない人はいるんですよ？」

そう告げると、少女は再び笑みを浮かべた。
「それじゃあ、わたしはそろそろ戻りますね」

笑顔のまま、少女は立ち去ろうとする。俺はそれ呼び止めようとして、あることに思い至った。

「おい」

ぶっきらぼうな呼びかけにも、少女は振り返る。

「まだお互いに自己紹介をしていなかった。俺は藤岡修司だ。あんたは？」

何度かここで会ったことがあったが、互いに名乗った覚えはない。そして、この少女の名前を今初めて知りたかったと思った。

俺の問いかけに、少女はにこりと笑う。

「美樹です、常盤^{ときわ}美樹^{みき}。よろしくお願いしますね、藤岡さん」
でも、と常盤は言葉を続ける。

「いきなり自己紹介をするなんて、どうしたんですか？」

「あんな話した後だしな。ああいった話は他人に聞かせるから話しやすいんだし、これから聞かせるつもりはない」

「ということは、他人以上ってことですか？」

「ま、そんなところだな」

俺の言葉に、常盤は小さく笑う。

「おかしい人ですね」

嫌味のない言葉に、俺は笑い返した。

「そうでなければ、あんな話はしないだろうよ」

そう言うと、常盤は今度こそ背を向けて歩き出す。ただ、その背中はやけに楽しそうに見えた。

俺も少しばかり愉快的な気持ちで、海面へと視線を移す。
すでに、餌は取られていた。

二章：夏休み

学校は夏休みを迎え、部活動にも入っていない俺は毎日が暇だった。ダラダラと寝て過ごすのも良いが、流石にそれは健康的ではない。

「暇だな……」

ベッドに寝転がったままで自室の天井を眺めつつ、ぼんやりと呟く。

生憎とゲームはあまりしないし、第一したいゲームがない。

俺はまとまらない思考のまま、窓の外へと目を向ける。

空には多数のいわし雲が浮かび、天気で言うなら曇りと言ったところだろう。

勢いをつけて体を起こし、壁にかけてある時計に目を向けた。

「一時二十分、か」

昼飯は規則正しく十二時過ぎに食べている。だから、今はまさしく暇だった。

軽く頭を掻きながら、部屋の隅に置いてあるバッグに目を向ける。コンパクトロッドなどの釣具が入っているバッグだ。

俺は数秒ほど黙考し、バッグを手に取る。

「ま、他にすることもないしな」

誰にともなく呟いて、俺は部屋を後にした。

堤防をのんびり歩けば、横合いから海風が通り抜けていく。

夏らしく、その風はあまり涼しくない。暑いか涼しいかと聞かれれば、一応涼しいと言えるが、クーラーなどに比べればまさに天地ほど差がある。

「そんな暑さの中、何故俺はこんなところを歩いているのだろう？」
口に出して、何を言っているんだと苦笑した。暇だから出てきたというのに、暑いから帰りたいと思っている自分の思考が面白かつ

ただ。

これが無意識の内に家から出てきていたというのなら、病院に行かなければいけないだろう。主に精神科に。

俺は麦茶を入れたペットボトルを持ってきたことを確認しつつ、いつもの場所へと向かう。今日は日差しもきつくはないが、一応帽子も入れてある。被っただけで損はない。

少しゆっくりとした歩調で、俺はいつもの場所へと着く。肩から提げていたバッグをコンクリートの上へと置くと、俺自身も腰を下ろした。

「どっこいしょつと……」

ちよつと年寄りくさいな、と苦笑する。その苦笑ついでにバッグを開け、中からペットボトルを取り出した。夏の暑さの中を歩いていたせいか、喉も乾いている。捻ってフタを外し、口をつけて飲む。「ふう、うまい」

渴きが潤ったのに気を良くし、今度はバッグからコンパクトロッドを取り出す。そして組み立て、仕掛けをセットした。餌をつけてから海面へと放る。

どうせ時間は売るほどあるんだ。のんびりと、考え事をするように。もしかしたら、俺と同じ暇人がくるかもしれないし、な。

釣りを始めてから一時間ほど経っただろうか。今日は魚一匹釣れるどころか、アタリもない。

「……ん？」

そんな中、遠くのほうから小さく音が聞こえた気がした。何か、重い物が倒れるような音。

その音に、俺は後ろを見る。しかし、後ろは防波のために壁になっているため、誰もいなかった。

「気のせい、か」

再び海面に目を向ける。だが、なんとなく気のせいではない気がした。

第六感とも言おうか、何かがあるかもしれないという不思議な感覚。風に乗ってきた音だったせいか、不確かであやふやな音。俺は数秒考えて、立ち上がった。

なに、何もなかったら笑い飛ばせばいいだけの話だ。

俺は釣り糸を海中から上げて、立ち上がる。そのついでに釣り針を見て納得した。

餌が取られていては、かかる魚はいないよな。

傍のコンクリート造りの階段を上り、俺は周りを見回す。車道などはなく、遊歩道のような道があるだけ。その道脇には木々が植えられている。春に釣りをしていたら桜の花びらが降ってきたことから、これは桜の木だろう。

そんなことを考えながら、俺は肩を竦めた。

やはり、勘違いだったらしい。

おそらく風に吹かれた木々がこすれた音だったのだろう。

俺はもう一度だけ確認して戻ろうと思った。

左を見て、右を見る。ほら、なにもいない。だから戻――

「え？」

そこで、俺は動きを止める。さっきは軽く見回しただけで気づかなかった。

二十メートルほど先の道端で、誰かが倒れている。しかも、その傍には何度か見たことのある白い帽子が転がっていた。

「っ！」

考える暇もなく駆け出す。二十メートルの距離をすぐに走り抜け、俺は倒れている常盤のすぐ傍に膝をついた。

「おい！ どうした！」

頭を打っていたらと考え、体を揺らさないようにして肩を叩く。常盤の状態を確認してみれば、やけに息が荒い。額からは汗を流し、苦しそうに両腕で自分の体を抱きしめていた。

周りを見回すが、誰もいない。携帯電話は持ち歩いていないし、

近くに公衆電話もなさそうだ。

「くそっ！ おい、常盤！ しつかりしろ！」

呼びかけることしかできず、俺はそう声をかける。すると、常盤はゆっくりと目を開いた。

「ふじ……おか、さん」

意識があることに軽く安堵する。しかし、事態は好転したわけでもなかった。常盤は体を丸の字に曲げ、苦しそうに呻く。

「お、おい！」

当然のことながら、俺に医学の知識があるわけがない。頭を打ったら動かしたらいけないとか、そのくらいことしか知らなかった。

以前病気だと言っていたが、それがどの程度のものかも知らない。

「常盤、今のお前を動かしたら危ないのか？」

だから、ここは本人に聞くしかなかった。すると、常盤は苦しげな表情のままで首を横に振る。

「いえ……でも、少し我慢すれば、落ち着くと思いますから」

そう言って、常盤は弱弱しい笑みを見せた。

その笑顔を見て、何故だかわからないが、

——ひどく、腹が立った。

「馬鹿なこと……言ってるじゃねえ！」

素人目に見ても、今の常盤の状態が危険なものだとわかる。

突然声を荒げた俺を、常盤は目を見開いて驚いていた。俺はそれにかまわず、常盤の体の左側に移動する。

「文句は後で聞いてやる」

それだけを告げ、俺は常盤を抱え上げた。俗にいう『お姫様抱っこ』というやつだが、この際そんなことはどうでもいい。

「え……藤岡、さん？」

それに対して、常盤は先ほどとは違った驚きを浮かべていた。
「すぐに病院に着く。だから、それまで我慢しろ」

俺はそれを封殺すると、常盤を抱えたままで駆け出す。幸いと言うべきか、病院はすぐ傍にある。

走っている間、常盤は顔を伏せたまま俺の右腕を握っているだけだった。

入り口の自動扉が開くと同時に、中へと駆け込む。そして、すぐ近くにいた看護師へと声をかけた。

「すみません！ こいつを診てやってください！」

流石に人一人を抱えたまま走ったせいも、かなり息が乱れる。それでもなんとか声を張り上げ、駆け寄ってくる看護師に常盤を見せた。すると、常盤を見て看護師の表情が変わる。

「美樹ちゃん！ ちょっと誰か、先生を呼んできて！ それと、ストレッチャーの準備をお願い！」

どうやら、常盤のことを知っているらしい。俺は大慌てで担当の医師らしき人を呼ぶ女性の姿に、僅かに安堵した。

「常盤、すぐに医者がくるってよ」

そして、腕に抱きかかえている常盤へと声をかける。常盤はそれに応えるように、俺の右腕を握る手に力を込めた。

声を出す元気がないだけなのかもしれないが、先ほどよりは呼吸も安定しているように見える。

俺が常盤の横顔を見ていると、奥のほうから台車のようなものが出てきた。たしか、あれはストレッチャーだったと思う。患者を乗せるためのものだ。

「ゆつくりと、ここに横たえてください」

看護師の指示に従って、常盤をゆつくりストレッチャーの上に寝かせる。すると、常盤が僅かに目を開いた。

「ありがとうございます…… 藤岡さん」

少し聞き取りにくかったが、それが感謝の言葉だとわかると俺は首を横に振る。

「気にすんな。謝るより、自分の体のことを考えとけ」

ぶつきらばうにそう言つと、常盤は小さく微笑んだ。そして、それを合図にしたかのように医者らしい男性が駆け寄ってくる。

俺はストレッチャーに乗ったまま運ばれる常盤を見ながら、大きく息を吐き出す。

どうやら、これでなんとかかなりそうだ。

そう考えると、安心したせいか疲労が襲ってきた。俺は手近にあった待合用の椅子に腰を下ろし、数回深呼吸をする。額を拭いてみれば、かなりの量の汗が手に付着した。

自分では気づかなかつたが、思ったよりも汗を掻いていたらしい。それが常盤を抱えて走ったからなのか、それとも常盤の状態に不安を覚えたからなのかは、俺には判断できなかった。

それからしばらく、俺は病院の椅子に背を預けたまま座っていた。待合室の時計を見てみれば、すでに六時を回っている。夏場のせいか、まだまだ外は明るい。だが、それでもすでに三時間以上が経過していた。

「よつと……」

ずっと同じ姿勢だったせいか、少し体が痛い。しかし、俺はそれを見せずに立ち上がった。ついでに軽く体を伸ばしてみると、ばきりと背骨が鳴る。

さすがに、これ以上この場にいるわけにはいかない。今更ながら、近くにいた看護師を捕まえて常盤のことを聞いてみることにした。

「え、美樹ちゃん？ 容態が安定して、今眠っているところなの」

「あ、そうですか……」

容態が安定したというところに、知らず安堵の息を吐く。

「それなら、会つのは無理ですね」

「ええ。会つなら明日以降にしてくれるかしら？」

寝ているから会えないというのなら、そこまで酷い病状ではないのだろう。俺はそう判断して、看護師に頭を下げた。

「わかりました。ありがとうございました」

そう告げて、背を向けようとする。だが、それよりも早く看護師が口を開いた。

「美樹ちゃんを運んできてくれて、ありがとうね」

思わぬ感謝の言葉に、俺は歩き出そうとした足が止まる。けれど、すぐさま思い直して今度こそはと歩き出した。

何気ない、感謝の言葉。

だけど、そんなものを聞いたのはずいぶん久しぶりの気がする。俺はそのまま視線を両腕へと落とす。

すでに常盤の重さはないが、なんとなく……本当になんとなくだが、まだ、抱きかかえたときの暖かさが残っている気がした。

ジリリリリ、と耳元で目覚ましの音が鳴り響く。その音量の大きさに、俺は顔をしかめつつ右手を伸ばした。

「やかま……しい」

リン、と残響を残し、目覚ましが止まる。別に低血圧というわけではないが、やはり寝起きに耳元で大音量が鳴っていたら気分も悪くなるというものだ。

俺は寝惚け眼を擦りつつ、ゆっくりと目を開く。すると、ぼやけた視界が徐々にクリアなものへと変わった。それに続くように眠気が霧散し、俺は上半身を起こす。

夏休みだから午後まで寝ていても良いが、それはさすがに駄目だろう。

そんな、真面目なようで当たり前のことを考えながら頭を覚醒させる。そして、今日は何をして時間を潰そうかと思考を回転させた。休日はどう過ごすか。それを一日の始まりに計画する人も多いだろう。中には行き当たりばったりで過ごす人もいるが、大抵は前者のはずだ。

そして俺は、前者であり後者でもある。

こうやって寝起きに一日の計画を考える日もあれば、何も考えずにダラダラと過ごす日もある。

まあ、何も考えなかった場合は大抵釣りにも出かけるのだが。くだらない思考を放棄して、俺は今日の予定を組み立てていく。朝飯を食べて、適当に宿題をやる。そして、そのあとは……。そこまで考えて、ふと昨日のことを思い出した。道の脇で、苦しげに倒れていた常盤にことを。俺はしばし沈思黙考する。

「……昼からは、見舞いに行ってみるか」
知らない仲ではないし、あそこで倒れていたということは、また釣り場に顔を出そうとしていた可能性が高い。そのことを考えて、はあ、とため息を吐く。

「物好きな奴だ……」
ま、見舞いの品はリンゴでいいだろう。

俺は病院の入り口をくぐり、受付へと足を向ける。どこの病室にいるかわからないし、もしも入院していなかったら笑えない。「すいません。常盤美樹という女の子の病室はどこでしょうか？」受付の女性に尋ねると、女性は少し不思議そうな顔をした。

「502号室ですが……」
どう見ても俺を見て、不思議そうな顔をしている。
「……顔に何かついていますか？」

とりあえず聞いてみた。これで、目と鼻と口と耳がついているなんて言われたらある意味尊敬してしまうだろう。

「いえ、すいません。美樹ちゃんのお見舞いに男の子が来たのは初めてだったもので……」

そう言っ、女性は気まずそうに笑う。俺はと言えば、大して気に留めなかった。

「まあ、俺も女性の見舞いにくるのは初めてですが」
「はい？」

「……なんでもありません。502号室ですね」
一礼して背を向ける。エレベーターを使うまでもない、階段で上

ろっ。

俺は少し薄暗い階段を上りながら、ふとあることが頭に浮かんだ。昨日、看護師は常盤の顔を見ただけで美樹ちゃんと呼んでいた。

そして今日も、部屋の番号を調べることなく502号室だと教えてもらった。

つまり、アイツは顔を覚えられるほど病院を訪れている。もしくは入院している。

通院している患者や入院している患者の全てを覚えているという可能性もないわけではないが、少しばかり現実味がない。ならば、やはり覚えられるほどの病院を訪れていると判断するべきか。常盤自身も何度か入院していると言っていたし、その可能性が一番高いだろう。

そんなことを考えながら階段を上っていくと、危うく5階を通り過ぎるところだった。

そのことに苦笑しながら、502号室を探す。右を見て、左を見る。最後の桁が2だから、多分端のほうの部屋だろう。

とりあえず、右側へと歩き出す。間違っけていても気にすることはない。

俺は行きがけに買った袋入りのリンゴを持ち替えつつ、壁にかかったプレートを確認していく。

「506……504……って、なんで最後に4がつく部屋があるんだ」

どうでもいいことに突っ込みをいれつつ、俺はその隣の部屋へと視線を向ける。

『502号室』

そんなプレートがかかった部屋。そして、その下には『常盤美樹』の文字があった。

名前が一つしかないということは、おそらく一人部屋なのだろう。俺はその扉の前に立ち、一度深呼吸をする。そして、軽くノックをした。

コンコン、という軽い音が響き、それに合わせて部屋の中から「
そこそと音がした。」

「はい、どうぞ」

返事があったことを確認して、俺はドアノブを捻る。

「邪魔するぞ」

「……え？」

何故か、そんな声が上がった。少しばかり呆然とした表情で俺を見る常盤に、俺は眉を寄せた。

「人の顔を見てその反応はいただけじゃないな」

「え、あ………すみません。ちょっとびっくりしちゃって」

そう言って、常盤は微笑む。

着ていたのはいつもの白のワンピースではなく、真っ白な寝間着やけに清潔そうなその服が、常盤を病人なんだということを教えてくれた。

「ほら、見舞いの品だ」

手に持ったリンゴを差し出す。すると、常盤はおずおずと受け取った。

「あ、ありがとうございます。中身は………リンゴですね。わたし、大好きなんですよ」

中身を見て、常盤は笑みを深くする。それに対して、俺は肩を竦めた。

「見舞いの品に果物は妥当すぎだと思ったがな。もしも病室に山ほどあったらどうしようかと思っていた」

「あはは、さすがにそれはないですよ。もしも山ほどあったとしても、わたしが食べちゃいますから」

そう言いながら、ベッド横にリンゴを置く。そして、常盤は少し楽しそうに俺を見た。

「それにしても、びっくりしちゃいましたよ」

「何がだ？」

「まさか、藤岡さんが見舞いに来てくれるとは思いませんでした」

常盤の言葉に、俺は息を吐く。

「知り合いが目の前で倒れていたんだ。それで気にしないほど、俺は無神経な人間ではないんでね。昨日はどうなったかもわからない状態で帰ったし、さすがに見舞いにくるさ」

「……嬉しいです」

常盤は小さく呟いて、クスリと笑った。

「喜んでもらえたようで何よりだ」

そんな常盤に、俺も笑って返す。そして、二人で顔を見合わせて静かに笑い合った。

そのまま笑い合うこと少々、俺は笑うのを止める。

そして、断りをいれてから手近にあった椅子に腰を下ろした。

病室ではエアコンが動いており、部屋の温度を適温に保っている。視線を横に向けてみれば、窓から海が見えた。

「なるほど、ここが前言っていた場所か」

以前、常盤は病室から釣りをしている俺を見ていたと言った。たしかに、この場所からなら俺が釣りをしている場所も見える。

「はい。ここから見える景色の中に、藤岡さんの後ろ姿もあったんですよ？」

「なるほど。しかし、気づかなかったな」

そもそも、病院があることすら知らなかったのだから気づくものなのだが。

俺はベッド脇に置いたリンゴを手に取り、常盤に顔を向ける。

「リンゴ、剥いてやろうか？」

俺がそう言うと、常盤は僅かに驚いた表情へと変わった。

「剥けるんですか？」

何の心配をしているんだ。

「心配するな。これでも去年の家庭科の成績は3だ」

「……それって、微妙ですね。もちろん、5段階評価で3ですよ？」

常盤の不安そうな声に、俺は答えない。ただ、軽く笑ってやった。
「あの、もしかして……」

「それじゃあ果物ナイフ借りるぞ」
有無を言わず果物ナイフを借りる。

常盤には答えなかったが、実際のところ5段階評価の3だ。それでも、3だからといって料理が苦手というわけではない。包丁さばきだってそれなりだ。

俺は手早くリンゴの皮を剥くと、均等に手ごろな大きさに切り分ける。それを皿に乗せて、ベッド脇の台に置いた。

台の上には花瓶が一つ。ただ、花は少し枯れかけている。

「なんだ、綺麗に剥けるじゃないですか」

そんな俺を見ながら、常盤が安心したような声を出す。俺はそれに軽く笑った。

「家庭科の成績が低いからといって、料理が下手とは限らないだろ。それに、去年は料理じゃなくて裁縫とかだったしな」

「紛らわしいですよ……じゃあ、いただきます」

手を合わせてから常盤がリンゴをかじる。その姿が、どこことなく小動物っぽく見えたのは俺の目の錯覚か。

「……なんですか？」

「いや、美味しそうに食べるなと思ったんだ」

「あ、藤岡さんも食べます？」

そう言って、常盤がリンゴを差し出してくる。

「いや、見舞いの品に買ってきたものを食べるわけにはいかないだろ」

「いいじゃないですか。はい、あーん」

常盤がリンゴを突き出してきた。

ちよつと待て。なんだ、その『あーん』というのは。

病室には俺と常盤以外誰もいないとはいえ、恥ずかしいものは恥ずかしい。

俺は差し出されたリンゴと、常盤を交互に見比べる。常盤は笑顔

だ。そして、その笑顔が告げている。

『食べてください』と。

「……いただきます」

笑顔の圧力に負け、差し出されたリンゴを食べる。すると、常盤は満足そうに頷いた。

俺はリンゴを咀嚼しながら窓の外を見る。

食べたリンゴは、それなりに美味しかった。

窓の外から聞こえてくる蝉の鳴き声をBGMに、俺と常盤はいろいろな話をする。

大したことではない、ほんの些細な話。

言葉少なに語り合う、お互いの話。

俺が話して、常盤が笑う。

常盤が話して、俺が相槌を打つ。

それは、学校で級友同士が話すようなものに過ぎない。しかし、常盤と話すときは少し違った印象を受けた。

どこか心安らぐような、落ち着くような感覚。

俺は椅子に腰掛けたまま、壁に背もたれる。そして、病室の天井を見上げて肩の力を抜いた。

「どうしたんですか？」

そんな俺を見て、常盤が不思議そうな顔をする。

「いや、大したことじゃない。ただ、落ち着くなと思っただけだ」

「落ち着く、ですか」

なおさら不思議そうな顔をする常盤に、俺は苦笑を返した。

「ああ、なんだろうな？ 言葉にはできないが、何故か落ち着くだよ」

ただ、お互いに喋るだけ。それだけなのに、やけに安心するのは何故だろう？

いつも釣りをしながら考えるような、未来に対する無気力な考えも、今は浮かばない。

常盤の雰囲気がそうさせるのだろうか？

俺が天井から視線を戻すと、常盤と目があつた。黒い、力強い意思を感じさせる瞳。俺はその瞳から視線を外し、今度は壁にかかったカレンダーに目を向ける。

「なあ」

「はい？」

「退院するには、まだ時間がかかるのか？」

「え？ あ、はい。一、二週間くらい様子を見るそうです」

そう言つて、常盤は右手を自身の胸に当てた。

「子供の頃から病気がちだったせいか、すぐに大げさになっちゃうんですよね」

どこか儚げに常盤が告げる。

「……用心するに越したことはないだろ」

「そうですね。でも、なんで退院のことを？」

さつきと同じように、不思議そうな顔をする常盤。俺はそれに対し、少しだけ目を逸らす。

「夏休み中、暇だな。もしかしたら、また見舞いに来るかもしれない」

俺がそう言つと、常盤はきょとんとした顔つきになり——嬉しげに笑つた。

「はい、どうぞ」

承諾の声に、俺はそうかと返す。

常盤も一人で病室にいるというのは暇だろうし、俺も夏休み中は暇だ。だから、また見舞いに来よう。

——そんな考えとは別に、また常盤と話をしたと思ったことは、なるべく考えないようにした。

夏の夕暮れは遅い。太陽が傾き、徐々に山際へと近づいていた。病室に斜陽が差し込み、俺は時計に目を向ける。

時刻はそろそろ夕食になろうかという時間。俺は、椅子から腰を

上げた。

「帰るんですか？」

ベッドの上から常盤が聞いてくる。俺はそれに対し、頷くことで答えた。

「病院はそろそろ夕食だろ？ それに、長居が過ぎると体に悪い」
既に何時間も居て言う台詞ではない。常盤もそれを思ったのか、面白そうに笑った。

「そうですね。そろそろ晩御飯が運ばれてきますし……」
常盤のそんな声に合わせるかのように、廊下の方からカラカラと音が聞こえてくる。

「あ、晩御飯ですね」

どうやら、夕食を配るための配膳台を押す音らしい。

「それじゃあ、俺はこれで失礼する」

丁度良い区切りになったな、と内心で思いつつ、ドアノブに手をかけた。しかし、ドアノブを捻るよりも早く背中に声がかかる。

「藤岡さん」

「……ん？」

手を止め、背後へと振り返る。すると、常盤がベッドの上で体を起こしていた。

「今日は、ありがとうございました」

斜陽に照らされながら、常盤が微笑む。黒の長髪が日に照らされ、金砂のように煌く。その光景はどこか神秘的で、

——俺は、ほんの少しだけその笑みに見惚れた。

「……気にするな」

何とかそう言って、俺はドアノブを捻る。そして、扉をくぐる前にもう一度だけ常盤へと目を向けた。

「またな」

我ながら素っ気無いと思う。しかし、常盤はそれに笑顔で答えて

くれた。

「はい。それじゃあ、また」

そんな常盤の言葉を耳に残し、扉を閉める。

僅かに騒がしい廊下で、俺は言いようのない感覚に身を預けていた。

「……帰るか」

呟いて、廊下を歩き出す。

その感覚が何なのか、俺にはわからない。

ただ、また明日も来ようと、そう思った。

三章：生きること

俺は空に敷き詰められた厚い雲を見ながら、いつもよりも湿気の多い風にため息を吐いた。

「これは、雨が降るかもしれないな」

一応バッグの中に折りたたみ傘はあるが、夏の夕立を防げるほど大きな傘ではない。横殴りの雨などが降れば、数秒で濡れ鼠になれるだろう。

そんな天候の下、俺は歩道を歩いていた。

右手には、つい先ほど花屋で購入した花束を握っている。

あれから数回常盤の病室を訪れたが、台の上に飾ってあった花が本格的に枯れてしまった。そのため、代わりになる花を選んでみたのだ。

薄い黄色に白。そしてピンク色の花。とりあえず、病室に映えそうな色の花を一本ずつ選んでみた。

さすがに、ここで菊の花や椿の花を選択するほど馬鹿な人間ではない。一応手に取ってはみたが、すぐに戻した。

そんなことを考えながら、俺はやや軽い足取りで歩いていく。なんとなくだが、気分が良かった。今まで心の中にあった、空虚めいたものが薄れているのを自覚する。

そんな自分に、俺は苦笑した。

今までと何が変わったのだろうか？

いや、何故変わったのだろうか？

そう考えたほうが正しい。

それを考えたところで、俺は再び苦笑した。

「いや、簡単なことだな」

呟いて、俺は今向かっている場所にいる人物のことを思い描く。釣りをしているところにいきなりやってきて、話しかけてきた。俺の考えを聞かせ、それを否定する。

道端で倒れていて、必死になって病院へと運んだ。

そして、病室で一日中話し合った。

「常盤、か……」

今まで出会ったことのないタイプの人間だった。

クラスメートの女子などと比べても、同じような者はいない。

クラスの女子は、やれ流行がどうだとか、昨日のドラマがどうだとか、そんな愚にもつかないことばかりを話しているだけだ。しかし、常盤は違った。

常盤は、どこか違う場所を見ている。日々をただ過ごすだけの俺とは違う、どこか決意めいたものを秘めていた。それが、少し眩しく見える。

俺と話す間も、とにかくアイツは楽しそうだ。何事にも積極的に動いて、それを楽しんでいる。

——それは多分、常盤が『生きる』ことを大切にしているから。

俺とは対極の考えだが、生きることを大切にできる常盤を、素直にすごいと思えた。

今の世の中、生きることによって飽きて自殺するような奴もゴロゴロいる。だから、そんな中で常盤みたいに生きることによって一生懸命な奴を、俺は見たことなかった。

人間は、自分がないものを持った相手に惹かれるという話を聞いたことがある。だからとは言わないが、アイツには親しみ以外のものを感じていた。

釣り場で何度も会い、ここ数日病室でも様々なことを話した。

俺は自分の感情を理解して、笑みに苦笑を滲ませる。

「……なんだ、簡単なことじゃないか」

そう、それは簡単なこと。

俺は、常盤アイツに惹かれているんだ。

病院の入り口をくぐり、常盤の病室へと向かう。

最近は何度も訪れていたため、迷わずに病室へと向かうことができた。すれ違う看護師に会釈をしながら、階段を上っていく。

常盤の病室は502号室。

俺は階段を一段一段踏みしめながら、エレベーターを使えば良かったかと今更ながらに後悔した。

少しばかり汗をかきながら、5階へと上りつく。俺は呼吸を整えて、常盤の病室へと足を向けた。

5階の中でも奥のほうにある病室だ。廊下で患者さんにぶつからないように注意しながら、前へと進む。

そして、すぐに『常盤美樹』というプレートのかかった病室前へとたどり着いた。

入り口の扉が、少しだけ開いている。俺は花束を持っていない左手を持ち上げ、とりあえずノックをしようとして、

「先生……わたし、あとどれくらい大丈夫なんですか？」

不意に中から聞こえたそんな声に、腕を止めた。いや、むしろ止まったと言ったほうが正しい。

「どれくらい、大丈夫？」

俺は、今聞いた言葉を反芻する。一体、何が大丈夫だと言うのか。なんとなく嫌な予感を覚えつつ、俺はノックのために上げた腕を下げる。

それは、ただの好奇心と興味だったのだろう。

常盤がどんな病気を抱えているのか、俺は知らない。だからそれを知りたいなんて思ってしまったのだから。

いつもの常盤からすると、そこまで酷い病気とは思えない。以前だって、病院が暇だからと言って抜け出してきたような奴だ。

だからきつと、大した病気じゃない。

……少なくとも、俺はそう思いたかった。

「本当は、患者にそういったことを教えるのはあまり良くないのですが……君とは長い付き合いです。それでは納得しないんですよね

？」

常盤の声に答えるように、男性の声が聞こえてくる。多分、担当の医師なのだろう。ただ、その声は僅かに硬かった。

「はい。わたしは、今の自分の状態を知りたいんです」

凜とした声で常盤が答える。すると、医師は諦めたようなため息を吐いた。

「……正直、危険な状態です。以前、私が言ったことは覚えていますか？」

危険な状態という言葉に、嫌な予感がさらに膨らむ。それが何だかわからない。だが、それでも俺は聞きたいと思って、

「はい。あと、半年も生きられれば良いほうだと」

そして、常盤がいつもの声色で告げた言葉に、俺は驚愕した。

「半、年……？」

呆然とした声が漏れた。しかし、話はそれだけでは終わってくれない。常盤が、どこか懐かしそうに言葉を紡ぐ。

「それを言われてから、もう5ヶ月近くが経ったんですね……懐かしいなあ。あの時は、お母さんが泣いちゃって困ったんですね」

——その声は、本当に懐かしそうで。

「……なんだよ、それ」

俺は、そんな常盤の言葉がやけに遠いものに聞こえた。

半年と言われて、すでに5ヶ月近くが経過している。ならば、残り1ヶ月だ。

そんな幼稚園児でも理解できそうなことだというのに、俺の頭は一向にそれを理解しようとしなない。

いや、正確には理解しなくなっただけだ。

俺は、力なく廊下の壁に背を預ける。そんな俺を置いて、常盤と医師の話はさらに続いていた。

「最近の状態も安定していますが、油断はできません。この間だっ

て、いきなり発作が起こったのですから……これからは、散歩に出るのも難しくなるでしょう」

「散歩ができないのは、ちょっと悲しいですね。でも、倒れちゃったからしょうがないですよ」

「はい。それと今言いましたが、状態は安定しています。しかし、心臓の状態は悪くなっています。今まで以上に、血液循環が悪くなっていますから」

だから、と医師は言葉を続ける。

「医師として告げます。今すぐにでも、手術を受けてください」

それは医師としてだけでなく、その人個人としての頼みでもあったのだろ。真剣で、真摯な願いだった。だが、常盤が選んだのは、否定。

「先生が、わたしのことを思ってくれているのはわかります。けれど、ごめんなさい。今まで通り、投薬だけで治療したいんです」

「常盤さん、たしかに手術は怖いかもしれませんが、ですが、手術を行えば高い可能性で病状は良くなるんですよ？」

常盤は、そんな医師の言葉に小さく笑った。

「わたしは、手術自体が怖いんじゃないんです。手術を受けたその後……可能性としては低いですけど、病状が快復しなかったときのこと、が怖いんです」

「その後？」

訝しげな声に、常盤は頷く。

「今まで、わたしは前を向いて生きてきたつもりです。自分のこの体にだって、負けるもんかって思ってます。でも……」

そこで、常盤は初めて不安を滲ませた声を漏らした。

「もしも手術を受けて駄目だったら、わたしはきつと前を向けなくなる。それが、とても怖いんです。生きていきたい。でも、それが無理だってわかったら、わたしは多分、立ち直れないから」

常盤の言葉に、医師は答えない。ただ、常盤の話すままになる。

「そうだったら、わたしは死んじゃうから」

ポツリと零れた言葉に、俺は右手から力が抜けた。

手に持った花束が、パサリと地面に落ちる。その音に、俺は麻痺した思考で『何故?』と思った。何故常盤が、そんな状態なのか……。

「誰かいるんですか?」

病室の中から、常盤の声が響く。

俺は、落とした花束を咄嗟に拾い、何故かその声から逃げるように、その場から駆け出した。

立ち聞きしていたのが後ろめたいというもある。しかしそれ以上に、今常盤と会ってまともに話せる自信は——ただの一片たりともなかった。

どうやって家まで帰り着いたのか、よく覚えていない。

俺は機械仕掛けの人形のように、ただ黙々と帰路を辿っていた。

「……ふう」

ため息を一つ吐き出す。思考が混濁して、何かを考えるとということが当分できそうになかった。

こんな状態で、よく車に轢かれなかったなと苦笑する。だが、すぐにその苦笑も消えてしまった。

「知らなかった、な」

常盤がどんな病気を抱えているのか、俺はまったく知らない。常盤に聞いたこともないし、常盤から話してきたこともなかった。

ちよつとした病気でしかないのだらうと、勝手に考えていた自分が今では憎らしい。できることなら、過去の自分を殴ってやりたかった。

いつもなら考えないようなことを考え、俺は再度ため息を吐く。

……どうやら、余程俺は混乱しているらしい。

俺は落ち着くために、深呼吸をする。しかし、数回深呼吸をして

みたが、あまり効果はなかった。だが、まあいい。混乱した思考でも、考えることは可能だ。

さっき聞いたことを思い返して、俺は右手を強く握り締める。詳しい病名などはわからない。だが、常盤は心臓に“何か”を抱えているらしい。それも、手術をしなければ命を失ってしまうほどのものを。

「……ちくしょう」

呟くが、それに意味はない。そもそも、ここで何を言おうとアイツには届かないのだから。

ベッドに寝転がって、自分の机を見る。机の上には、見舞いのために買っていた花を置いていた。

帰る途中に力一杯握り締めてしまったせい、茎が折れてずいぶん歪な形になっている。しかし、それでもなお花は綺麗に咲いていた。

「折れたところから下を切れば、持っていけるか……」

さすがに、今からもう一度病院に行く気にはなれない。しかし、一晩眠って明日になれば少しはマシになっているはずだ。

それまでは、俺の部屋の一角でも飾っておいてもらおうと思う。

ぼんやりとした思考のまま、俺は意識を覚醒させる。枕元の目覚まし時計を取ってみれば、時刻は八時前を指していた。

「あんま、よく眠れなつたな……」

少しは眠れたが、熟睡には程遠い。眠りは浅く、ふとした拍子に目が覚める。それを何度も繰り返したただけだ。

俺は一度背伸びをすると、ベッドから降りる。今が夏休みで良かった。こんな状態で学校に行ったら、授業中に居眠りすること請け合いだ。

とりあえず、顔を洗えば気分もすっきりするだろう。

そう考えて、俺は洗面所へと足を向ける。その途中で母親とすれ違ったが、夏休みのこの時間に起きたことが珍しかったらしく、目

を丸くしていた。

「明日は雨が降るかもしれないわねー」

ついでに、そんな失礼極まりないことを言い残してくれる。俺はそれに顔をしかめながら、顔を洗った。

タオルで顔を拭けば、それなりにすっきりした気がする。そう思ったところで、大分腹が減っていることに気づいた。

思い返してみれば、昨日の夕食はあまり食べてなかった気がする。俺は三大欲求の一つ、食欲の促すまま今度はリビングへと足を向けた。仮に朝食の準備が出来ていなくても、何か食べる物ぐらいはあるだろう。

そう思いながらリビングに入ると、幸いと言うべきか朝食の準備はすでに出来ていた。

俺はテーブル脇の椅子に座り、朝食を食べようと手を合わせる。

しかし、朝食を食べるよりも早く、俺の目の端に何かが映った。

「ん？　なんだこれ。回覧板？」

テーブルの隅に置かれていたものを手に取り、文面を確認する。

何のことはない、ごくありふれた町内の回覧板だ。俺はパラパラとページをめくっていく。

夏休みの過ごし方とか、近所の家で子犬が産まれたとか、町内会議の案内とか。

一言で言えば、俺にとっては意味のないものだった。

俺は元にあつた場所へと回覧板を戻そうとして、最後のページに書かれていた文面を見てその手を止める。

「……夏祭り、か」

もう一度引き寄せて見てみれば、今度の日曜日に近くの神社で開かれる夏祭りについて書かれていた。

この夏祭りというのは、毎年この時期に開かれるものだ。由緒ある祭りらしく、規模は大きい。夜店などもかなり出るし、毎年当日は多くの人を訪れる。途中で花火なども上がるため、人気のあるイベントだ。

俺はこの神社が何を祀っているかを思い出そうと首を捻り、眉間を指で叩く。

「なんだっけ？」

神社だから神様を祀っているはずなのだが、何を祀っていたか思い出せない。

もう一度文面を見てみれば、ご丁寧に神社の成り立ちから祀っている神様について書かれていた。

俺はそれを流し読みしようとして——祀っているものに目を留める。

「これは……」

ソレを見て、俺は思わず文面を見直す。だが、間違いがないことを確認すると俺は小さく笑った。

「地獄に仏、渡りに船ってか？」

母親が怪訝そうな顔で見てるが、気にしない。これは、文字通り渡りに船だ。

俺は良くなった気分満足しながら、朝食に手をつける。

なにはともあれ、まずは食事を摂らないとな。

一晩だけ部屋を飾ってくれた花を再び束にして、俺は家を後にする。

昨日に比べたら雲も少なく、柔らかいものの日差しがキツイ。俺は日差しに手をかざしながら、陽炎が揺らめきそうな道路を歩いていく。

街路樹では蝉が大合唱し、その下を小学生らしき子供が駆け抜ける。俺はそれを横目に見ながら、病院の入り口をくぐった。その途端、人工的な涼しさが俺の体を冷やしてくれる。

額に浮いた汗を手の甲で拭い、俺は軽く息を吐いた。少しばかり喉が渴いたので、自販機でスポーツドリンクを買って喉を潤す。中身を飲み干すと、空き缶を近くのゴミ箱へと入れた。

そのままエレベーターへと進み、上へのボタンを押す。すると、

すぐに扉が開いた。

俺がエレベーターの中に入ると、他に乗る人はいないようだったので扉を閉める。

機械音と共に上昇していく感覚に、俺は目を閉じた。

正直に言つと、常盤に会って平静を保てる自信はあまりない。だが、昨日の話を信じるならば、今の常盤は危険な状態なのだ。

一秒後には……なんてことも、ありえない話ではない。それを考えると、多少話し辛くても会ったほうが良いに決まっている。

チン、という軽快な音と共にエレベーターが止まり、扉が開く。

俺は目を開けると、考えるのを中断して廊下へと踏み出した。

二回ほど深呼吸をして、病室の扉をノックする。

「はい。どうぞ」

すぐさま返ってくる声に、俺は僅かに安堵して扉を開いた。

「邪魔をするぞ」

「あ、藤岡さん」

俺の顔を見た常盤は、少し微笑む。だが、すぐに拗ねたような顔になった。

「昨日は来てくれませんでしたよね」

昨日、という言葉に俺は一瞬動きを止める。しかし、すぐに苦笑という形で動きを再開した。

「仕方ないだろ。ちよつと用事があつたんだ」

俺がそう言つと、常盤は一転して笑顔になる。

「ふふふ、ごめんなさい。冗談ですよ。藤岡さんにだって都合はありますし、わたしはお見舞いに来てもらっている側の人間ですから」

そこまで言つて、常盤はただ、と話を続けた。

「毎日来てくれていましたから、昨日も来てくれるのかなって思つてました」

少しばかり照れたように笑つ。俺はその笑みに笑い返ししながら、手に持った花を差し出す。

「見舞いの品だ。ま、それに対する詫びだとも思ってくれ」

「あ、わざわざありがとうございます。この前花が枯れちゃって、ちょうど良かったですよ。それにしても、綺麗な花ですね。藤岡さんが選んでくれたんですか？」

花をしげしげと眺めながら常盤が聞いてくる。

「一応な。病室に合いそうな色の花を適当に見繕ってきた」

「菊の花とか椿の花じゃないんですね」

「……お前は俺を何だと思っているんだ？」

俺がそう言っていると、常盤は楽しそうに笑った。

「冗談です」

……一応、選択肢の一つに考えてしまったことは伏せておこう。

俺が花を手渡すと、常盤は手馴れた手際で花瓶に挿す。

俺はそれを見ながら、近くにあった椅子に腰を下ろした。

「なあ……」

なるべく昨日のことを意識しないようにして、常盤へと話しかける。

「はい？ なんですか？」

それに小首をかしげる常盤。

「入院患者って、外に出ることはできないのか？」

「外に、ですか？ 散歩くらいなら問題ないですけど」

「ああ、違う違う。遠出することはできないのかなって思ってたさ」

俺がそう言っていると、常盤は少しばかり考え込む。そして、すぐに顔を上げた。

「お医者さんの許可が出れば大丈夫だと思いますけど……それがどうかしたんですか？ あ、またそこに行きます？」

柔らかく笑いながら、常盤が窓の外を指差す。そこには、俺がいつも釣りをしていた場所があった。

「それも悪くないな。けど、今回は別の場所に行きたいと思ってな」

「別の場所ですか？」

不思議そうな顔をする常盤に、俺はああと頷く。

「今度の日曜に、近くの神社で祭りがあるんだ。良かったら、それに行かないか？」

遠回しに誘っても、常盤は気づいてくれない可能性がある。だから、俺は直球で誘ってみることにした。

「お祭りがあるんですか。それは……行ってみたいですね」

「夜店とかもたくさん出るみたいだし、楽しいと思うぞ。病室にいるだけじゃ気が滅入ると思ったんだが」

「うーん……」

俺の言葉に、常盤は困ったように笑う。

「行きたいのは山々なんですが、この前倒れちゃったせいで医者さんの許可を取れるかわからないんですよ」

「……そうか」

そう言われては、無理強いすることはできない。

「すいません」

「いや、常盤が謝ることじゃない。俺が勝手に誘っただけだ」

苦笑しながら手を振る。内心ではかなり落胆しているが、それを表に出すわけにはいかなかった、

「後で先生に聞いておきますけど、あんまり期待はできないんですよ」

「わかった」

頷く。そして、この話はここで終わりにした。

「じゃあ、またな」

もうじき夕食の時間になる。時計を見てそう判断した俺は、席を辞することにした。

「はい。お見舞いに来てくれて、ありがとうございました」

「……まあ、こっちは暇人だ。そんな面と向かって礼を言われることじゃない」

常盤の顔を直視できず、僅かに目を逸らす。だが、常盤はそれを気にすることなく話を続けた。

「いえ、入院しているのつて、すごく退屈なんですよ。だから、お見舞いに来てもらえるっていうのはとてもありがたいことなんです」

「そうか。じゃあ、お相子つてことでいいな」

「ふふつ、そうですね」

顔を見合わせて、しばし笑い合う。

すると、不意にノックの音が響いた。

「あ、晩御飯が来たみたいです」

「そうみたいだな。それじゃあ、俺はこれで帰るよ」

そう言つて、俺は扉のほうへと向かう。すると、俺がドアノブに触れるよりも早く扉が開いた。

「美樹、ちゃんと休んで……あら？」

そんな声と共に、入ってきた女性が俺に目を向ける。
歳は三十代後半ぐらいだろうか。その面差しは、どことなく常盤に似ている。もしか、常盤のお母さんだろうか？

「あ、お母さん」

俺の考えを肯定するように、常盤が嬉しそうな声を上げる。どうやら、母で間違いないらしい。とりあえず会釈をしておく。

「こちらの方は？」

自身の母から話を振られ、常盤は笑みを浮かべる。

「この前話した藤岡さん。よくお見舞いに来てくれるんだ」

何を話したんだろうか？ ふとそんな考えが浮かんだが、すぐさま放棄した。

「あらあら、貴方が藤岡さんね。美樹の母です。美樹が倒れているところを運んでくれたそうで……」

深々と頭を下げてくる。

「いや、そんな大したことじゃないですから。頭を上げてください」
俺はそれに慌てつつ、なんとか頭を上げてもらう。年上の人に頭を下げられることなんて、今まであまりなかった。

「それに、よく美樹のお見舞いに来てくれてるんでしょ？ いつも、美樹が嬉しそうに話してくれるわ」

「はあ……」

どう答えていいかわからず、とりあえず相槌を打つ。すると、常盤が若干困ったような声を上げた。

「もっつ、お母さんったら。余計なことと言わないでよ」

「あら、怒られちゃったわね」

クスクスと笑う。そして、台の上の花瓶に目を向けた。

「もしかして、花を持ってきてくれたのかしら？」

「はい。どんな花が良いかわからなかったので、色で選んだものですよ」

「ありがとうね。買ってこなきゃいけないって思ってたから。それに、十分良い花を選んできてくれたみたいだし」

「そう言ってもらえれば、幸いです。それでは、俺はこの辺で……」
後は親子水入らずのほうがいいだろう。そう思って、俺はドアノブに手をかける。すると、常盤のお母さんが声を上げた。

「それじゃあ、玄関まで送るわね」

「え？ いや、大丈夫ですよ」

「いいからいいから。それじゃ、美樹はゆっくりしてるのよ」

半ば押されるように常盤の病室を後にする。病室の扉を閉めると、常盤のお母さんは俺へと振り向いた。

「少しお話したいことがあるのだけど、良いかしら？」

「……はい。かまいません」

俺が頷くと、常盤のお母さんは微笑んで歩き出す。俺もつられるように、それに続いて歩き出した。

階段を上り、屋上の扉を開ける。すると、熱気染みた風が通り抜けていった。

屋上は斜陽に照らされ、その中を歩いていく。そして、少し先にあったベンチへと二人で腰を下ろした。

「それで、話っているのはなんですか？」

話を振る。今の俺に対する話と言えば、常盤のことしかないだろう。

う。

常盤のお母さんは、どこか遠くを見ながら口を開いた。

「美樹が病気を抱えているのは知っているわよね」

「はい」

「その病気のせいで、美樹の余命が少ないことも？」

「……はい。聞くつもりはなかったんですが、昨日常盤と担当の医師の人が話しているのを聞いて……」

そう、と呟き、目を伏せる。俺はそれを見ながら、次の話を待った。

「美樹は先天性の心臓病を患っていてね。心不全って言ったらわかるかしら？ 生まれつき血液を循環させる力が弱くて、よく入院していたの」

頷くことも出来ずに、俺は話に耳を傾ける。

「それには？ 度から？ 度までの症状があるんだけど、美樹は？ 度。歩くぐらいなら問題ないけど、走ったりはできない体なの。そのせいで、あまり学校にも通えなくてね。小さい頃から寂しい思いをさせてきたわ」

「……そうですか」

それくらいしか言えない自分が、酷く憎らしい。常盤のお母さんは、どこか物悲しい表情で空を眺めている。

「それでも、美樹は自分の体に負けなかった。辛い毎日を一生懸命生きて、今まで生きてきたの。でも、ここ数年で美樹の心臓はさらに悪くなった。そのせいで、今年の三月が終わる頃には余命半年って宣告されて……」

そこまで話して、常盤のお母さんは俺のほうを見た。

「だけど、それでもあの子は負けようとしなかった。時折発作に襲われても、それでも笑みを浮かべて言うのよ、『わたしは負けない生きてみせるよ』って。母として、そんなあの子見ているのは辛かった。でも、あの子が頑張っているのに私が諦めるわけにもいかなかった」

そこで、ふつと安らいだ表情へと変わる。

「それにここ一ヶ月ぐらい、あの子は今までにない表情を見せてくれるようになったわ」

「今までにない表情、ですか？」

「ええ。時折病室を抜け出して、どこかに行くようになったのよ。そして、帰ってきたらとても楽しそうな表情をしているの。あんなに楽しそうな美樹の表情を見たのは、十七年間の中でも初めてだったわ」

その言葉に、俺はどう答えていいかわからなかった。そんな俺を見た常盤のお母さんは穏やかに笑う。

「別に責めているわけじゃないのよ。美樹がたまに、窓の外を眺めているのは知っていたわ。貴方、あそこでよく釣りをしていたでしょう？　だけど、美樹は違うことを言うのよね。『あの人は釣りをしてるんじゃない』って。そして、何をしているのか気になって見に行ってしまったのよ」

困った子ね、と楽しげに呟く。俺もそれに同調して、少しだけ笑った。

「それに、ここ最近はそれが顕著になったわ。その上、よく貴方のことを話してくれるようになった。だから、貴方がどんな人間かはよく知っているつもり。まあ、母親としては少し寂しいけどね」

そこまで言って、不意に真剣な表情になる。

「そんな貴方だから、お願いしたいことがあるの」

真剣な声色での言葉に、俺は姿勢を正す。

「なんでしょう」

「あの子に、美樹に手術を受けるように言ってくれないかしら。このままだと、あの子はあと一ヶ月もたない。だから、私はあの子に手術を受けてほしいの」

「ですが、常盤は手術を受けたくないって……」

「ええ。それもわかってるわ。もしも手術を受けても駄目だったら、あの子は前を向いて生きることができなくなるかもしれない。成功

する確率は七割近くあるけど、三割は失敗するの。そして、成功しても効果がないこともある。それが、あの子にとっては怖い。だから、貴方にそれを取り除いてほしいの」

「……取り除けるか、わかりませんよ？」

自信は、正直言つてあまりない。だが、そんな俺を見て常盤のお母さんは笑った。

「大丈夫。貴方で無理なら、私にも無理よ」

その言葉には、本当に自分の娘を思う気持ちがあつて、

「——わかりました」

俺は、頷いていた。

「ありがとう。ごめんなさいね、こんなことを頼んじやつて」

「いえ、アイツは友達ですから」

そう言つと、常盤のお母さんは何故か表情を楽しそうなものに変える。

「友達？ 本当にそれだけ？」

「え、いや、あの……」

いきなりの豹変振りに、俺は思わず口をつぐむ。しかし、常盤のお母さんはすでに俺の感情を見抜いているらしい。

「冗談よ。それと、安心なさい。あの子だって、貴方のことは悪く思つてない。いえ、むしろその逆だから」

そこまで言つて、ベンチから立ち上がる。

「あの、ちょっとお願いがあるんですが」

立ち上がった常盤のお母さん呼び止めると、俺はさつき常盤に話したことを話した。すると、少し考え込んで頷いてくれる。

「お祭り、ね。担当のお医者さんが渋るでしょうけど、なんとか頼み込んでみるわ」

「お願いします！」

俺が頭を下げると、常盤のお母さんは小さく笑つ。

「気にしなくていいわ。だって、それもあの子のためなんでしょ？」
その言葉に、俺は真剣に頷いた。

常盤のお母さんに見送られ、俺は帰路につく。そして、歩きながらさっきの会話を思い出していた。

常盤は、一生懸命生きている。それに比べて、俺はどうだろうか？『そんな面倒でつまらない生活でも、渴望してやまない人はいるんですよ？』

以前常盤が言った言葉。それには、一体どれほどの感情が込められていたのだろう。

アイツは、本当に生きることが望んでいた。俺が面倒でつまらないと思う生活も、アイツにとってはまったく別のものなんだ。

「くそっ！」

傍にあった木を、思いっきり殴りつける。拳に激痛が走ったけれど、そんなものはどうでも良かった。今はただ、自分が許せない。もう一人の自分がいたなら、その顔を全力で殴ってやりたいくらいだ。

自分の生きてきた道に嫌気を感じつつ、俺はひたすらに帰路を辿る。

その横では、五月蠅いくらいに蝉が鳴いていた。

四章：想いと願い

大分傾いてきた太陽を見ながら、俺はのんびりと道を歩いていく。おそらく、あと一時間もすれば完全に日が沈むだろう。

いつもとは違い、俺以外にも歩いている人が大勢いる。しかも、大半が浴衣に身を包んでいた。

それぞれ思い思いの浴衣を着て、楽しそうな顔をしている。

俺はその流れに逆らうように、逆方向へと歩いていく。そして、目の前の建物を前に気を引き締めた。

「よし、行くか」

深呼吸をして、一歩前に出る。多少、というか、かなり緊張するがなんとか堪えた。

病院の玄関先に目を向ければ、誰かが立っているのが見える。

「あ、藤岡さん！」

その“誰か”は、こっちへ歩きながら手を振った。

「――」

それを見て、俺は硬直する。

誰か、なんて言うことはない、常盤だ。俺を藤岡さんと呼ぶのは常盤しかない。

だが、いつもの常盤とは違う。

「あれ、どうかしました？」

そう言って首をかしげる常盤は、浴衣だった。

藍色を基調とした、全体的に落ちついた雰囲気浴衣。

ところどころに花らしきものの刺繍が施されており、それがとても似合っている。

赤い鼻緒の下駄に、流れる黒髪も、いつもとは雰囲気を変えていた。

ああ、遠回しに言うのはやめよう。

「綺麗だ」

思わず、口からそう漏れてしまっくらい綺麗だった。

「え、あ……」

その言葉に、常盤も硬直する。そして、困ったように頬を染めて下を向いた。

「ほ、褒めてくれるのは嬉しいですけど、いきなりは困りますよ」

それでも喜んでくれたのだろう。その表情はとても明るい。

「でも、ありがとうございます」

嬉しそうにそう言って、軽く頭を下げてる。ただ、顔はかなり赤かったが。

「いやあ、若いつていうのは良いわねえ」

そんな俺と常盤を見ながら、常盤のお母さんが歩み寄ってくる。

俺はといえば、今更自分の言葉が恥ずかしくなって顔を赤くした。

「照れない照れない。さて、それじゃ美樹のことをお願いするわね」

「はい」

「うん。じゃあ行ってきます、お母さん」

小さく手を振って、常盤が俺の横に並ぶ。

常盤のお母さんに一度頭を下げながら、俺と常盤は歩き出した。

カランコロンと常盤の下駄が鳴る。俺はそれを聞きながら、隣の常盤へと目を向けた。

「髪は結わなかったんだな」

「はい。後ろでまとめようかとも思ってたんですけど、お母さんがこっちのほうが良いって言うからそのままにしておいたんです」

「そうか……」

そこまで言って、目を逸らす。なんというか、酷く落ち着かない。まるで、隣を歩いているのが常盤じゃないみたいだ。

「あの、どうかしましたか？」

そんな俺を見て不安になったのか、常盤が聞いてくる。俺はそれにどう答えたものかと思案し、正直に答えることにした。

「その、なんだ。まるで、常盤が別人みたいに見えてな」

「別人……ですか？」

「ああ。さっきも言ったんだが、あー……いつもよりも綺麗に見える。さっきも言ったんだが、あー……いつもよりも綺麗に見える。すると、常盤が顔を赤くしながら慌てたように手を振り回した。」

「そこまで言っただけ、何を言ってるんだと傍の木に頭を打ちつけたくなる。すると、常盤が顔を赤くしながら慌てたように手を振り回した。」

「いや、からかっているつもりはないんだが……」

「実際、別人のように見えたというのは嘘ではない。俺がそう告げると、常盤は沈黙してしまった。耳まで赤いのは、多分夕暮れのせいではないだろう。」

二人で会話もないまま、神社への道を歩いていく。

失敗したかな、と後悔しようとした時、不意に暖かいものが右手を包んだ。

視線を下げてみれば、黙ったままの常盤が俺の右手を握っている。

「は、はぐれたら嫌ですか……」

「どこか不安そうに、常盤がそう言った。俺は、自分の手よりも一回り小さい常盤の手を優しく握り返す。」

きつとそのときの俺は、常盤に負けなくらい赤くなっていた。

楽しい祭囃子。そして、それを楽しむかのような喧騒。

俺は常盤と手を繋いだままで、それらを軽く見やった。

「うわぁ……すごいですね」

その横では、常盤が驚いたような声を上げている。

「なんだ、常盤は祭りにきたことなかったのか？」

「いえ、ないことはないんですけど、こんなに大きなお祭りは初めてです」

「そうか……なら、楽しまないとな」

「はい！」

元氣良く答える常盤に、俺は苦笑を浮かべた。こんな常盤を見ただけでも、祭りに来た甲斐があったというものだ。

「さて、それじゃあどうする？ 晩飯は食べてきたのか？」

「あ、はい。藤岡さんは食べてないんですか？」

「ああ。軽い腹ごしらえはしてるけど、折角の祭りだから色々食べようと思ってな」

「それじゃあ、食べ歩きながら面白そうなものを探しましょうか？」

「よし、そうしよう」

そう言つて、俺は常盤の手を引いて歩き出す。すると、常盤も嬉しそうに歩き出した。

「まずは何をしようか……」

立ち並ぶ夜店を眺めながら、吟味する。大きい祭りだけあって、夜店の数も種類も多いため悩んでしまう。

金魚すくい。ヨーヨー釣り。射的。くじ引き。遊ぶものはかなりある。

食べるものも、焼きそばにたこ焼き、焼き鳥にアンズ飴、綿菓子等の定番なものから、あまり見たことないものまで色々なものがある。

「あ、藤岡さん。わたしあれがしたいです」

そんな中で、常盤が射的を指差す。俺はふむ、と頷いてそちらへと歩き出した。

「お、いらつしゃい！ やっていくかい？」

店主らしき人が威勢よく声をかけてくる。

「ええ、二人分で」

そう言つてお金を出そうとすると、店主は俺と常盤を見て手を振る。

「おいおいアンちゃん、そこに張り紙があるだろ？」

「はい？」

言われて目を下に向けてみると、たしかに張り紙があった。

『カップル割引。カップルの方達は、半額になります』

「……………」

俺と常盤は、思わず顔を見合わせる。常盤の顔が赤いが、俺も多分赤い。

「だから、金は一人分ってことなんだが……なんだ、もしかしてカップルじゃなかったのかい？」

怪訝そうな店主にどういったものかと悩むが、それよりも早く常盤が動いた。

「いえ、カップルです」

楽しそうにそう言って、手ではなく腕にしがみついてくる。それを見た店主は、ニヤニヤと笑った。

「お熱いことで。ほら、それじゃあ二人分」

俺は半ば凍結しかけの思考をなんとか動かし、一人分のお金を渡してコルク銃を受け取る。そして、機械のような動きでコルクを銃口に詰めた。

「わたし、射的って初めてなんですよねー」

横では、常盤が嬉々としてコルク銃を構えている。

俺はそんな常盤の楽しそうな様子に、ふっと肩の力を抜いた。

「えいつ。あ、外れちゃいました」

コルク銃なんて使ったことはないのだろう。常盤が放った弾丸は、景品から少し離れたところを通り過ぎていく。

「キャラメルかよ」

「わたし、甘いもの好きなんです」

そう言いつつ、常盤は真剣な表情で再びキャラメルの箱に狙いをつける。もしかしたら負けず嫌いなものかもしれないな。

俺は新しい常盤の一面に苦笑しながら、適度に狙いやすいものを狙う。そして引き金を引くと、狙い通り景品を撃ち落した。

「お、上手だねえ」

「どうも。まあ、狙いやすいやつでしたから」

店主から景品……小さなぬいぐるみを受け取る。常盤のほうを見てみれば、少し悔しそうな顔で俺を見ていた。

「うう……上手ですね」

「一応、初めてじゃないからな」

常盤のコルク銃を見ると、すでに弾は残り一発。それでも、何も倒すことができなかったようだ。

最後の弾を銃に詰めて、常盤は再度キャラメル箱を狙う。

いや、初めての奴がそんな小さな箱を狙うのはどうかと思うんだが。

そう思うが、決して口にはしない。黙って常盤を見る。

常盤は狙いをつけて、引き金を引く。するとコルクが宙を飛び、キャラメルの箱に命中して倒れた。

「やった！ やりましたよ！」

諸手を挙げて喜ぶ常盤に、俺は苦笑する。余程嬉しいのだろう、店主からキャラメルを受け取ったときの笑顔は眩しいくらいだ。

そんな常盤に、俺はさっき手に入れた小さなぬいぐるみを差し出す。

「俺が持っけていても意味ないし、やるよ」

「え、いいんですか？」

答えの代わりに、ぬいぐるみを手渡すことで応える。すると、常盤は笑顔で頷いた。

「ありがとうございます。大事にしますね」

喜んでもらえてなによりだ。

俺は、片手でぬいぐるみを抱きかかえた常盤と共に歩き出す。すると、常盤は空いているほうの手で俺の手を握ってきた。

「それじゃあ、他のお店を見て回りましょうか」

「そうだな」

なに、時間はまだある。だから今は、精一杯楽しむとしよう。

甘いもの好きという宣言通り、常盤が目をつけたのは綿菓子とリンゴ飴だった。

袋に入った綿菓子を購入し、さらには小さめのリンゴ飴を買って

嬉しそうに笑う。俺はそんな常盤を見ながら、近くにあった焼き鳥を何本か購入した。

「藤岡さんは甘いもの食べないんですか？」

「ああ。甘いものはあまり好きじゃなくてな」

食べないわけではないが、好んで食べるほどじゃない。

俺がそういうと、常盤は『美味しいのに……』と小さく呟いた。

その呟きに苦笑しつつ、俺と常盤は人ごみに流されるように歩いていく。

「どこか落ち着いて食べられる場所に行くか？」

「そうですね……せつかくですから、味わって食べたいですし。そうしましょうか」

常盤の手を引きながら、俺は移動する。人ごみの間を通り抜け、夜店の掛け声を潜り抜けていく。そして、神社へと続く石段が目に入ったところで常盤のほうを向いた。

「それじゃ、上に上がるか。こっちはあまり人がいないし」

俺の言葉に、常盤は石段のほうを見て苦笑する。

「神社のお祭りなのに、肝心の神社に人があまりいないっていうのは……」

「気にするな。普通の人にとっては、夜店に行くことがお祭りなんだよ」

常盤の意見を流しつつ、石段を上っていく。ただ、少し急な石段のため、常盤が転ばないようにゆっくりと。

「こういうとき、浴衣と下駄って歩きにくいですね」

少し大変そうに石段を上る常盤。それに対し、俺は軽く肩を竦めた。

「いいじゃないか、風情があって」

「そういう問題じゃないと思うんですけど」

互いに笑い、石段を上りきる。そして、予想通りほとんど人がいなかった。

おみくじとお守りを売るための場所があるだけで、他に店はない。

俺は隅のほうに設置されている木製の椅子に目をつけると、常盤と共にそっちへと足を向けた。

「さて、ここで食べるか」

椅子に腰を下ろす。そして、先ほど購入した焼き鳥に口をつけた。夜店の焼き鳥らしい大雑把な味だが、この場合はそれが正解だろう。海の家で不味い料理を食べるのと同じ原理だ。

俺の隣では、常盤が笑顔でリンゴ飴をかじっている。その様子は、やはりというか小動物っぽい。

いつもは大人びて見えるが、今は歳相応の女の子だ。

「あむ……ん、何ですか？」

リンゴ飴をかじりながら、不思議そうな顔で聞いてくる。

「いや、何も」

目を逸らし、焼き鳥を平らげていく。晩飯は軽めに食べていただけだから、余裕で食べることができた。

俺は常盤がリンゴ飴に熱中していることを横目で確認して、さり気なくおみくじとお守り売っている場所に目を向ける。

今日は常盤とお祭りに来た。常盤と一緒にお祭りを楽しみたい。

だが、それと等分ぐらいの目的が別にある。

「ちよつと、席を外すぞ」

常盤にそう言っ、俺は立ち上がる。常盤が驚いたような目で見ると、俺が大したことじゃないと告げると再びリンゴ飴に目を落とした。

そんな常盤に、余程リンゴ飴が気に入ったんだなと内心で笑う。

そして、そんな愉快的な気持ちを引き締めて歩を進めた。

「すいません」

売り子の女性に声をかける。すると、女性は珍しそうな顔で俺のほうを見た。俺ぐらいの歳の人間が、夜店ではなくこちらに来たことが珍しいのだろう。

「いらつしゃいませ。おみくじですか？」

「いえ、お守りが欲しいんですが……」

そう言つて、売っているお守りを見る。いくつか種類があるが、俺はその中で目的の物を見つけて手に取った。

「これをください」

「はい。七百円になります」

財布からお金を取り出し、売り子の女性に渡す。そして、俺は踵を返した。

「何を買っていたんですか？」

俺が椅子に戻ると、常盤がすぐさま聞いてくる。その手にリンゴ飴はない。おそらく、食べてしまったのだろう。

「いや、ちよつとな」

曖昧に返して、軽く数回深呼吸をする。一度目を瞑り、気持ちを落ち着けてから目を開いた。

「常盤」

おそらく、ここまで真剣に話すのは生まれて初めてだろう。それと読み取ったのか、常盤も表情を引き締める。

「……なんですか？」

それでも、常盤の表情はどこか穏やかだった。

「俺は、お前がどんな病気を抱えているか知ってる」

上手く話すことなんて、できはしない。だから、俺にできることは真っ直ぐに話すことだけだ。

「……そうですか」

「ああ。お前のお母さんが教えてくれた」

俺がそう言つと、常盤は困つたように夜空を見る。

「隠して、おきたかったです」

「俺も、あまり知りたいとは思つてなかった」

常盤に倣うように、俺も夜空を仰ぐ。

「軽い病気なんだつて、そう思つてたよ」

「ふふ……そうだったら良かったんですけどね」

悲しそうに呟いて、常盤が自分の左胸に手を当てる。

「ちよつと、怠け者なんですよ。しっかりと仕事をしてくれれば良

いんですけどね」

怠け者、ね。

言いて妙だな、と俺は思う。そして、それは自身に向けた皮肉だろう。

「……どこまで知っていますか？」

「全部……とは言えないが、大体のことは知っている」

「わたしが、残り少ない命ということですか？」

「——ああ」

常盤本人の口から余命が少ないと聞かされると、今までにない感情を受けた。じわじわと、本当なんだという実感が押し寄せてくる。俺が頷いたのを見て、常盤は手に持ったぬいぐるみと綿菓子を横へと置く。そして、俺の方へと肩を預けた。それに対し、俺は驚きの声を上げようとして止める。

——常盤の肩は、僅かに震えていた。

俺は息を吐く。そして、柄じゃないと思いつつも常盤の肩に手を置いた。

そして、何分ほど経っただろうか？

不意に常盤が呟いた。

「……あと、一ヶ月ぐらいだそうです」

常盤は下を向いているため、その表情は見えない。

「一ヶ月、か」

何が、とは言わなかった。だが、言われずともわかる。

「最近、ああそうなんだって、自分でもわかるようになってきました。だって、前以上に怠け者が怠けるようになってきたんですからおどけようとしたのだろうが、その声は震えていた。」

「お医者さんが言うには、血液を全身に送る力が弱くなっているそうです。そして、最近はさらにその力が弱くなってるって……」
「だったら……」

「わかってます！」

俺が手術を受けるように言おうとすると、それを遮るように常盤が声を張り上げた。

「手術を受けて成功すれば、良くなる可能性が高いってことも。でも、失敗する可能性もある。残り一ヶ月なら、手術を受けるほうが良いってこともわかってます」

そこまで言って、常盤が顔を上げる。

その顔は、涙で濡れていた。

「でも、もし失敗したら？」

不安を押し込めた声で、常盤は話を続ける。

「もし失敗したら、その残った一ヶ月もなくなるかもしれない。仮に成功したとしても、効果が出ないかもしれない……そう思うと、不安なんです」

再び、常盤は顔を伏せた。小さくしゃくりを上げ、小さな子供のように背を丸める。

そんな常盤を見て、俺は内心で首を振った。

どうやら、俺は常盤を見間違えていたようだ。

生きることに一生懸命で、前向き。そう思った。ああ、それは間違っていない。

「常盤」

だけど、不安を感じないわけじゃない。

生きることを望んでいて、それと同じくらいに死ぬことに恐怖していた。

「俺さ」

だから、俺は呼びかける。

「お前に生きてほしい」

「え……？」

俺の言葉で、常盤が再び前を向いてくれるなら。

「手術を受けることが怖いってことも、わかってる。そりゃ怖いよな。自分の体にメスを入れられるってだけでも十分怖い。失敗する

可能性もある。それに、成功しても効果がないかもしれない」

自分で言ってみても、これは確かに怖かった。それでも、俺は常盤に語りかける。

「俺は常盤本人じゃないから、その怖さもお前の万分の一にも満たないかもしれない。わかるって言っても、それはただの想像だ。だから、本当の意味ではわかってやれないかもしれない」

でも、と俺は言葉を紡ぐ。

「俺は、それでも常盤に生きていてほしいんだ」

それが、自分勝手な願いだということもわかっている。

これほど恐怖している常盤に願うことではないと、それもわかっている。

——それでも、俺は願う。

「だから、手術を受けてくれないか？」

そう言って、先ほど買ったお守りを取り出す。

その表面に刻まれた文字は『病氣平癒』。

この神社に祀られし神は、健康祈願の神だ。だから、ここに来たと思った。

常盤の右手に、お守りを握らせる。すると、常盤は顔を伏せたまままで口を開いた。

「……なんで、ですか？」

「え？」

「なんで、わたしに生きていてほしいんですか？」

常盤が顔を上げる。そして、小さな、それでいてよく通る声で尋ねてくる。

その問いに、俺は頬を掻いた。

「まあ、なんというか……」

友達だから、なんて理由はどこかに放り投げる。

「俺、常盤のこと……ああ、こんなときまで苗字で呼ぶのは野暮だ

な」

一度息を吸う。そして、告げた。

「美樹のことが、好きなんだ」

小さく、常盤……美樹の肩が震える。

俺はそれに気づかない振りをして、告白を続けた。

「最初はさ、変な奴だと思ったんだ。いきなり話しかけてくるし、俺は美樹に見覚えないし。でも、色々と話していく内にさ、なんというか、その……惹かれたんだ」

だからさ、と話を続ける。

「好きな女の子に生きていてほしいって願うのは、当然だろ？」

例えそれが、美樹にとっては辛いものでも。俺は生きていてほしい。

「……最初は」

どこか懐かしむような表情で、美樹は俺を見る。

「最初は、あなたのことが少しだけ憎らしかったです。いつも、病室から見えるあの場所でぼんやりと海を眺めて……それが、どれだけ羨ましく、憧れたか」

美樹の話を、俺は頷く。

「それは、悪いことをしたな」

「ええ。でも、そんなあなたを見て思いました。もしも、わたしの心臓がちゃんと動いてくれたら、あなたのように生きることがつまらないと思ってしまったんじゃないかって。そう思ったら、生きるのって難しいなって思っちゃいました」

どこか悲しそうに、美樹が微笑む。

「生きたい。でも、生きるのって難しいんですね」

「……まったくだ」

顔を見合わせながら、笑う。そして、美樹は真剣な表情へと変わった。

「わたしは結局、逃げていたんですね。生きたいけれど、怖くて逃げていた」

肯定も、否定もしない。それは、美樹自身が判断することだ。

「でも、これで決心が付きました」

そこまで言って、花のような笑みを浮かべる。

「わたし、手術を受けます」

一瞬、何を言われたのかわからなかった。

「……本当か！」

数秒遅れて尋ね返すと、美樹は苦笑する。

「はい。どうせ残り一ヶ月です。それなら、賭けたほうが良いですよ？」

今まではそれができなかったんですけどね、と美樹が笑う。そこには、先ほどのまでの恐怖の色はない。

俺は、ほっと安堵の息を吐いて、

「それに、手術を受けないとこれから先、修司さんと一緒にいられませんから」

美樹の発言に、思わず呼吸が止まった。

「あ、え……？」

一瞬、自分の名前を呼ばれたということに気づかなかった。すると、常盤は楽しそうに笑う。

「修司さんだって、わたしのことを名前で呼んだじゃないですか。だから、お相手です」

それに、と頬を上気させて美樹が告げる。

「さっきのつて、告白じゃないんですか？」

言われて思い返す。たしかに、俺は美樹に好きだと告げた。ああ、告げたな。

「い、いや。間違ってる」

俺がそう言っていると、美樹は嬉しそうに立ち上がる。そして、俺がさっきお守りを買ったところへと小走りに駆けていく。

売り子の人と会話し、何かを手にとって美樹が戻ってくる。

「じゃあ修司さん、これは、お返しです」

笑顔で、一つのお守りを差し出してくる。その表面に書かれた文字は『健康祈願』。

「……俺は健康だが」

意図がわからずにそう言うと、美樹は少しばかり申し訳なさそう
な、それでいて真剣な目で俺を見る。

「もしも、これはもしもの話です。わたしが手術を受けても駄目だ
ったら、わたしは修司さんの傍にいたことができなくなってしま
います」

「それは……」

「もしもです。でも、可能性はあるんです。だから、今のうちにこ
れを渡しておきたいんです。もしわたしが……」

そこまで言って、辛そうに目を伏せた。

俺は、それ以上言わせたくなくて、思わず美樹を抱きしめる。

それでも、止めることはできなかった。

「もし、わたしが死んでしまっても、修司さんは……しっかり生き
てくださいね」

「っ！」

抱きしめる腕に、力を込める。

「修司さん……あはは、ちよつと、痛いですよ」

「……馬鹿なことを言うからだ」

歯を食いしはる。でも、それでも俺は笑みを浮かべた。

「そんな馬鹿は、ずっと俺の隣にいろ」

俺がそう言うと、美樹は泣きながら笑う。

「告白の次は、プロポーズですか？」

返事をする代わりに、美樹の顔を優しく撫でる。

そして、ゆっくりと顔を近づけていく。

美樹は目を瞑り、俺も目を瞑った。

徐々に距離が近づく中で、賑やかな音と共に空に大輪の花火が咲く。

——花火の光に照らされる中、俺と美樹の距離はゼロになった。

祭り以降、慌しい日々が待っていた。

美樹が手術を受けることを医師と美樹のお母さんに告げ、その手術を行うために色々することがあったからだ。

俺はその間、できる限り美樹の傍にいた。

美樹が不安にならないように……というのは建前で、ただ一緒にいたからだったからだ。

そんな俺と美樹を見て、美樹のお母さんがやけに楽しそうにしていたのは余談だろう。

多分、名前で呼び合っている時点でバレていたんだと思うけれど、それでも、優しい眼差しで俺と美樹のことを見守ってくれていた。

……まあ、美樹の甘え方が半端ではなかったせいもあるのだが。

俺が病院から帰ろうとすれば、俺の服の裾を握って帰してくれなかったり。あまつさえ涙目で『帰るんですか？』なんて言われた日には、本気で病院に泊まるうかと思っただくらいだ。

そんな日々も、正直に言えば楽しかった。

美樹が隣にいて、一緒に笑っていられる。それが、とても楽しくて、幸せで。

このままずっと過ごせたらどれだけ良いかと、心の中で切望した。手術が行われる日までの、短い期間。俺は、ずっと美樹と一緒にいた。

でもそれは、どこか泡沫の夢みたいで。

すぐに崩れてしまふんじゃないかって、一人のときに不安になる。そんな考えが浮かぶ度に、俺は頭を振って否定した。

「どうしたんですか？」

美樹が話しかけてくる。俺はそれに、笑みを浮かべて首を振った。

「なんでもない。ただ、幸せだと思ってな」

「そうですねー。たしかに、幸せです」

そう言っ、美樹が幸せそうに笑う。

大丈夫。きっと、これからずっとこの笑顔を見ていける。

俺は自分のポケットに入れてあるお守りを握り締めて、ただ一心に、そう願った。

五章：願い

夏休みも中盤に差し掛かり、登校日。

「お前さ、なんか雰囲気変わったよな」

久しぶりに会うなり、畑山がそんなことを言ってきた。

「……そうか？」

「ああ。丸くなったというか、柔らかくなったというか。一瞬、別人かと思ったぞ」

変わった、だろうか？

俺としては、そんな感覚は全くない。しかしながら、変わったと言われれば思い当たるフシもある。

「ま、久しぶりだからな。そのせいじゃないか？」

そう言つて、俺は笑う。本当は違うのだが。すると、畑山は俺を指差してそれだ、と頷いた。

「笑い方だ。お前、笑い方が全然違う。なんつーか、お前はそんな顔で笑うキャラじゃねえよ。何だ、その優男染みた笑いは」

「ずいぶんと言ってくれるな」

意識して顔をしかめる。

「ああ、今までのお前はそんな顔だったなー。しかし、無理やりって感じがするぞ」

……どうやら、俺はずいぶんと変わっていたらしい。

そんな俺を見て、畑山はニヤリと笑った。

「ははあ……さては女だな？」

小指を立てながら聞いてくる。俺はどう答えたものかと肩を竦めた。

「ま、まさか図星だと！ 抜け駆けしやがって！」

「なんでお前に抜け駆けの遠慮をしないといけないんだ。しかも、決め付けるなよ」

まあ、正解だけだな。

言外にそれを告げると、畑山は驚愕しながら数歩後ろへと下がった。

「こ、こここの野郎……」

何やら面白い顔をしている畑山を笑い、俺は窓の外を眺める。

さて、学校が終わったらさっさと病院へ行こう。

明日から明後日かはわからないが、美樹の手術まで、もう時間もないしな。

学校が終わり、俺は制服のまま病院へと向かう。家に帰って着替えてもいいが、病院とは逆方向のため時間が惜しい。本当は、今日学校に行くのもサボろうとしたのだが、美樹にきちんと行くように言われてしまったので渋々登校した。

「……依存してるなあ」

今まで気づかなかった自分の一面に、俺は自嘲するように呟く。

しかし、それが不快ではない。

俺は、畑山の変わったという言葉に納得する。たしかに、大分変わったようだ。

病院の入り口をくぐり、通り慣れた通路を歩いていく。エレベーターに乗り込み、5階のボタンを押した。

冷房が効いているとはいえ、階段を上るのは面倒だ。

5階についた俺は、まっすぐ502号室へと向かう。そして、軽くノックした。

「はい。開いてますよ」

中から聞こえてくる声に、俺は表情を緩めてドアノブを捻る。

「邪魔するぞ」

一応そう言っ、病室へと入った。すると、美樹が笑顔で迎えてくれる。

「お疲れ様です、修司さん。学校はどうでしたか？」

「いつも通り、ってとこだったな」

「いつも通り、ですか。良いなあ……わたしも、学校に行きたいで

すよ」

拗ねたような声に、俺は苦笑した。

「今度の手術が終われば、通えるようになるさ」

「そうですね……成功すれば、通えますよね」

少しばかり、美樹の声が変わる。それを聞いた俺は、おどけるように口を開いた。

「そうだったら、俺の後輩になるんだけどな」

「そ、それは言わないでくださいよ」

俺の言葉に、美樹が頬を膨らませる。

美樹は俺と同じ年だが、病気のせいで留年していた。そのため、復学したら俺の後輩ということになる。

「あ、だったら先輩って呼んだほうが良いですか？」

そんなことを言つて、一転して楽しそうに笑う。

「……いや、今のままでいい」

それはそれで良いが。

俺が美樹と笑い合っていると、病室の扉がノックされる。美樹が返事をする、白衣を着た医師が入ってきた。医師は俺を一度見ると、小さく笑う。

「おや、今日も来てくれたんだね」

「はい」

答えて会釈する。医師は少し考え込むが、すぐに再度笑みを浮かべた。

「君なら一緒に聞いてくれてもいいか……」

しかし、その笑みには真剣さが滲んでいる。その雰囲気、俺と美樹は背筋を正した。

「手術を行う日が決まったよ。本来は数週間前に決定しなければいけないんだけどね。まあ、君の場合は出来るだけ早いほうがいいから、明日ということになった」

あまり前例のないことだけどね、と医師は苦笑する。

「明日、ですか……」

医師の言葉を美樹が呟く。しかし、覚悟は決まっている。すぐに力強く頷いた。

「はい」

強い意志が宿った目を見て、医師は満足そうに頷き返す。

「細かい説明は、君のお母さんが来てから話すよ。だから、それまでは二人でゆっくりしていてほしい」

それだけを言い残して、医師は病室を出て行く。俺と美樹はそれを見送ってから、目を合わせた。

「明日か」

「明日、ですね」

不思議と、気分は落ち着いていた。

「頑張れよ」

「はい。頑張ります」

それだけで、安心できる。

そして、美樹のお母さんが来るまで他愛のない話をずっと続けた。それがきつと、一番良いと思って。

今が夏休みで良かった。

そんなことを思いながら、人がほとんどいない朝の道路を歩いていく。

今日は、とうとう美樹の手術の日。だから、自然と朝早くに目が覚めた。

もしも学校があつたとしても、確実にサボっていただろう。今の俺にとつて、学校と美樹では重要さが違いすぎる。

急いで走り出しそんな足を押さえて、あえてのんびり歩く。

朝とはいえ、今は真夏だ。十分に気温が高い。走れば汗だくなるだろう。

俺は手で自分を扇ぎながら、朝の空を見上げる。

空には雲一つなく、晴れ渡っていた。

手術日和というものがあるかはわからないが、曇りや雨よりかは

良い気がする。

どうでもいいことか、と一人呟いて、俺は病院とは違う方向へと歩く。階段を下りて、コンクリート造りの地面に足を下ろした。そのまま歩を進め、俺はいつも釣りをしていた場所へとたどり着く。美樹との出会いは、ここだったな。

思い返して苦笑する。

第一声が『釣れますか？』だ。挨拶でもない。ずいぶん変わった出会いだなと思う。

俺はそのままいつも自分が座っていた場所を見つめ、過去の自分を幻視する。

ただぼんやりと海を眺めていた自分。生きる目的を持たず、ただ流されるままに日々を送る自分。

それが、なんと色褪せて見えることか。

俺は視線を海のほうへと移す。

目の前に広がる海原は、太陽の光を反射しながら、相変わらずの海風を届けてくれた。

病室の扉をノックする。

「はい、どうぞ」

いつもと変わらない声に、俺は安堵しながら扉を開いた。

「邪魔するぞ」

それに対し、俺もいつもと変わらない言葉を投げかける。

俺が病室に入ると、美樹と美樹のお母さんが一緒にいた。しかし、美樹のお母さんは俺を見ると楽しそうな顔をしてこちらへと歩いてくる。

「おはよう、藤岡君」

「おはようございます」

挨拶をして一礼すると、美樹のお母さんはそれに頷いて俺の横を通り過ぎた。

「ちょっと、お医者さんのところに行ってくるわ。その間、美樹を

よろしくね」

そう言って、何故かウインクを一つ残していく。

……いや、どうよろしくするというのでしょうか。

俺はなるべく考えないようにしつつ、美樹の傍まで歩み寄る。

「おはよう、美樹」

「はい。おはようございます、修司さん」

挨拶を交わして、共に笑みを浮かべた。しかし、不意に美樹が俺のほうへと顔を寄せてくる。

「ど、どうした？」

思わず一步下がるが、美樹はそれにかまわず、何やら考え込むようにしていた。そしてすぐに頷く。

「修司さん。ここに来る前に、あそこに行つたでしょう？」

そんなことを言いながら、窓の外を指差す。すると、その先には俺がついさっきまでいた場所があつた。

「あ、ああ。よくわかつたな」

もしかして見ていたのだろうか？

「見てはいませんよ。ただ、修司さんから海風の匂いがしたんです」
そう言って、どこか懐かしそうに笑う。

「そんなの、窓を開ければいいだろうに」

「いいえ。ここでの匂いと、あの場所での匂いは全然違います。あの場所の海風は、どこか優しい感じがするんです」

俺にはわからないが、美樹がそうだと言ふのならそうなのだろう。俺がそんなことを考えていると、美樹がさらに距離を詰めて俺の服に顔を埋める。

「お、おい美樹？」

突然の行動に焦る俺。しかし、美樹は落ち着いた声を出す。

「海風と、修司さんの匂いがします……」

だが、よく見れば、美樹は震えていた。そんな美樹を見て、俺は一つ息を吐く。

やはり、直前になれば誰でも怖くなる。それが、当たり前だ。

「そつだよな……やつぱり、怖いよな」

「はい……とても、怖い」

そのまま嗚咽を漏らしそうな美樹を、優しく抱きしめる。

少しでも不安が紛れればと、そう願いながら。

「やつぱり、怖いんです。失敗したらって思うと……どうしようもなく怖くなるんです」

「……そうか」

抱きしめる力を、僅かに強くする。すると、美樹が顔を上げた。

「でも、それでも……」

泣いてはいない。ただ、それでも瞳は揺れている。

「それでも、わたしは……生きていたいから」

「ああ……」

頑張れ、なんて言葉はもうかけない。

ただ優しく、強く抱きしめていた。

しばらくして、美樹も大分落ちついた。そして、照れ臭そうに頬を染める。

「すいません。つい、不安が出ちゃいました。お母さんにだって、笑顔でいられたのに」

俺が抱きしめたままで、美樹が下を向く。俺はそれに、首を横に振った。

「それが当然だ。俺だって、美樹の立場なら不安になるよ」

でも、と言葉を続けて、俺は意地悪く笑う。

「俺にだけ不安を見せてくれて、嬉しいかな」

そう言つと、美樹はさらに顔を赤くして今度は横を向いた。

「そ、そんなことは言わないでください」

「ははは、悪い悪い」

「むう……誠意がこもってないです」

一転して、美樹が拗ねる。そんな美樹に、俺は苦笑した。

「誠意って……どうすれば許してくれるんだ？」

苦笑交じりに尋ねる。すると、美樹は目を瞑った。そして、無言で少し俺に顔を寄せてくる。

「あー……それじゃないと許してくれないのか」

思わず病室の中と扉を見た。しかし、当然ながら俺達以外誰もいない。

美樹が小さく頷くのを見て、俺はしょうがないと腹をくくった。

美樹の黒髪を掻き分け、そして、ゆっくりと口付けする。

二度目のキス。

少しばかり、美樹の唇は冷たかった。それが、やけに生々しく感じられる。

それが何秒だったのか、俺にはわからない。

短かった気もするし、ずいぶん長く感じた気もする。

「ぶはあ……」

キスが終わったのは、美樹が止めていた呼吸を再開した時だった。

美樹は顔全体を上気させて、それでも、どこか幸せそうに微笑む。

「これで、許してあげます」

「……それは良かった」

それに対して俺は、やけに暴れまわる心臓をなだめながらそう言った。だが、どうにも感情が収まりそうにない。

俺は美樹の肩をつかむ。

「しゅ、修司さん？」

驚いたような、それでいてどこか嬉しそうな目で美樹が見てくる。

俺はそれに促されるように、美樹へと顔を近づけ――、

コンコン。

突然鳴ったノックの音に、弾かれたようにお互い距離を取った。

「ど、どうぞー」

赤くなっただままで美樹が返事をする。すると、美樹のお母さんが病室に入ってきた。

「美樹、そろそろ……」

美樹のお母さんはそこまで言って、俺と美樹の顔を見る。そして、

少しばかり考えこんで楽しそうに笑う。

「お邪魔だったかしら？」

その言葉に、俺と美樹は顔を赤くして首を横に振った。

手術用の服に着替えた美樹が、ストレッチャーに乗る。俺は美樹のお母さんと一緒に、その傍にいた。

「美樹、頑張るのよ」

美樹のお母さんは、どこか不安そうに美樹の手を握る。それに、美樹は笑って頷いた。

「大丈夫だよお母さん。うん、きっと大丈夫」

自分に言い聞かせるように言って、美樹が俺のほうを見る。そして、もう片方の手を伸ばしてきた。

俺はその手を握りしめ、静かに頷く。すると、美樹は笑顔で頷いた。

「修司さんにこれをお願いしましたから。きっと、大丈夫ですよ」

そう言って、傍らにある『病気平癒』のお守りに目を向ける。

「そうだな。きっと、大丈夫だ」

少しでも美樹の不安を取り除きたくて、俺も小さく笑う。

今美樹に笑顔を向けなくて、いつ向ければ良いというのだろうか。

「では、そろそろ……」

看護師がそう言って、ストレッチャーが動き出す。

手術室への短い道のりだが、俺と美樹のお母さんはずっと美樹の手を握り締めていた。

手術中を知らせるランプが灯る。俺はそれを確認してから、すぐ近くにあった椅子へ腰を下ろした。その横へ、美樹のお母さんも腰を下ろしてくる。

「……ありがとうね、藤岡君」

そして、手術室の扉を見ながらそう言った。

「何がですか？」

俺もそれに倣うように、手術室の扉を見る。

「あの子が手術を受けてくれたのは、貴方のおかげよ。そのことにお礼を言いたいのだ」

嬉しげに、だが、その声にはどこか寂しげなものが含まれていた。
「……俺は、美樹に生きていてほしいだけです。そして、それは俺のワガママです」

「そのワガママのおかげで、私も助かるんだけどね。でも……」

美樹のお母さんは、自分の手元に視線を落とす。

「やっぱり、自分の娘だもの。私の力で何とかしたかったって思うのは、やっぱりエゴかしら？」

その言葉に、俺は何も言うことができない。いや、言うべきではないと思った。

俺が黙っていると、美樹のお母さんは困ったように笑う。

「ごめんなさいね。藤岡君のことを責めているわけじゃないの。ただ、娘が自分の手から離れたように感じたから……ふふ、あの子がお嫁にいくときって、こんな気分なのかしら」

冗談めいた言葉に、俺も笑い返す。すると、美樹のお母さんはいつものような、意地悪い笑みを浮かべる。

「もちろん、旦那さんは藤岡君よ？」

「っ！ いきなり何を言うんですか？」

いきなりな発言に、俺は危つく舌を嚙むところだった。そんな俺を見て、美樹のお母さんがクスクスと笑う。しかし、ひとしきり笑い終えると、先ほどまでの笑顔はなかった。

そこにはただ、美樹の母として、自分の娘の無事を心の底から心配している母親の顔しかない。

「……駄目ね。いくら笑っても、心からは笑えないわ」

小刻みに肩を震わせ、美樹のお母さんは手術室のランプを見る。その気持ちは、俺も同じだった。いくら笑ってみても、本当は笑えていない。

何かを口に出して、それを笑う。そうしてないと、不安に押し

潰されそうだった。

ポケットに入れた、お祭りのときに美樹から渡されたお守りを握り締める。

大丈夫。美樹なら大丈夫。

半ば自分に言い聞かせるように、呟いた。

「大丈夫ですよ……」

もし神様とやらがいるのなら、切に願いたい。

——美樹の手術が成功することを。

何時間経っただろうか？

美樹のお母さんとここで待つて、すでに一日くらい経過した気がする。しかし、窓の外は日が沈みそうなぐらいだから、まだその半分も過ぎていないのだろう。

俺は時計を見に行こうかと思うが、その間に美樹の手術が終わったらと思うとこの場を離れる気もなくなる。

「藤岡君」

俺がぼんやりしていると、美樹のお母さんがこっちを見ていた。だが、その顔には少しばかり疲労の色が見える。

「少し、食べ物と飲み物を買ってくるわね。何か、食べれない物とかある？」

「あ、悪いですよ。俺が……」

行きます、と言うよりも早く、美樹のお母さんは苦笑した。

「貴方、ここを動かたくないんでしょう？ 顔に書いてあるわよ」「いや、その……」

図星だ。だが、美樹の母親であるこの人のほうが、もっとこの場を離れたくないだろうに。

「いいのよ。私、少し外の空気が吸いたくなったの」

「……わかりました、ありがとうございます。なら、お願いします」

一礼すると、美樹のお母さんは笑って歩き出す。俺はその背中に、心の中でもう一度礼を告げた。

美樹のお母さんの姿が見えなくなると、俺は再び手術室の扉へと目を向ける。

頑張れ、美樹。

ただひたすらに、そう願う。

完全に日が暮れ、夜の帳が下りる。

俺は病院の壁に背を預けて、ぼんやりと天井を眺めた。

今までの人生で、これほど時間の流れを遅く感じたことはない。もしかしたら、すでに時計の短針が五周くらいしているのではないだろうか？

すでに、俺と美樹のお母さんの間に会話は無い。時間が経つにつれ、もしかしたらという嫌な想像が口を重くするのだ。

重苦しい雰囲気の中、不意に手術中を知らせるランプが消える。それに気づいた俺はすぐに立ち上がり、続いて気づいた美樹のお母さんも立ち上がった。

少し経ってから手術室の扉が開く。そして、美樹を乗せたストレッチャーと、手術を担当した医師が出てきた。

俺はすぐさま美樹が乗っているストレッチャーに近づく。そして、恐怖を抑えながら医師に尋ねる。

「……手術は、成功ですか？」

きつと、その声は震えていた。

医師はそんな俺の表情を見て、柔らかく笑う。

「大丈夫、成功しましたよ。あとは、術後の経過次第ですね」
成功、という言葉聞いた瞬間、力が抜けてその場に座り込む。

「は、はは……良かった。本当に……良かった」

麻酔で眠っている美樹の横で、俺は良かったと繰り返す。見れば、美樹のお母さんも気が抜けたように座り込んでいる。

俺は眠っている美樹の手を取った。

「良かったな、美樹……成功だつてよ」
涙ながらに、握り締める。

その手は、やけに暖かく感じられた。

その後、美樹は安静にしないといけないということで、ICU（集中治療部）という場所に移された。

ICUとは、病状が安定するまでの間、経験をつんだ医師や看護師が、心電図や血圧、脈拍、呼吸、出血量、尿量など、たえず変化する病状を注意深く観察し、病状の急変があればいつでも緊急処置を行えるようにする場所だ。

そこで、美樹はしばらく過ごすことになる。

俺と美樹のお母さんは、ICUに運ばれていった美樹を見送ってから、共に気が抜けたように椅子に腰を下ろした。

「……成功、でしたね」

ぼんやりと、呟く。すると美樹のお母さんは涙ながらに頷いた。
「そう、ね……」

本当に嬉しいのだろう。かくいう俺も、言葉では言い表せないくらい嬉しい。

欲を言えば、このまま美樹の傍にいたかった。しかし、それはただのワガママに過ぎない。

「本当に、良かった……」

こみ上げてきた何かを、なんとか堪える。

美樹が元気になるのが待ち遠しい。

これからは、ずっと一緒にいられる。

一緒に学校に通うこともできるし、一緒にどこかへ出かけることもできる。

それはきつと、とても楽しい日々だ。

——そう、このときは、そんな幻想^{ユメ}を思い描いていた。

六章：誓い

数日経った夜。

不意に、俺の携帯が着信を告げる。あまり使うことのない、いつも部屋に置きっぱなしにしてある携帯だ。俺は、自分の部屋で通話を繋ぐ。

「はい、もしも」

「藤岡君っ！」

俺の声を遮るように、女性の声が耳を貫いた。その声は、美樹のお母さんのもの。しかし、今までにない切迫した響きがあった。

「どうしたんですか？」

それを訝しく思いながら、尋ねる。

——嫌な予感がした。

電話口の美樹のお母さんはひどく動揺しているらしい。

——俺にかけてくる電話なんて、用件は限られているじゃないか。

それでもなんとか落ち着こうとしたのだろう。

——今、俺に電話をするとしたら。

美樹のお母さんが、口を開く。

「美樹が……美樹が……」

——それは、美樹に関することしかないじゃないか！

「美樹がどうかしたんですか！」

叫ぶ。

頭に浮かぶのは、ストレッチャーで運ばれていった美樹の姿。

「美樹の容態が急変して、今、お医者さんが……」

「っ！ すぐに行きます！」

それだけで十分だった。俺は上着を適当に羽織ると、弾かれたように駆け出す。

外は、今にも泣きそうな雲に覆われていた。

「はあ、はあ、はあ……くそっ！」

人がいない夜道を走り抜ける。息が上がるが、足を止めるつもりはない。今更ながら、自転車でも使えば良かったと後悔した。

それでも走り、俺は病院へとたどり着く。

病院の中は走らないように、なんて張り紙を無視して、俺は階段へと走る。

今はエレベーターを待っている時間も惜しい。

二段飛ばしに階段を駆け上がり、転がるようにICUへと向かう。そして、ICUの扉の前に、美樹のお母さんがいた。酷く落ち着かないように、扉の前を行ったり来たりしている。

俺の姿を見ると、すぐさま駆け寄ってきた。

「藤岡君……美樹が……」

その顔は、青ざめている。その様子に、俺は最悪の事態を思い描いてしまった。

「美樹が、どうしたんですか？」

震える声を抑えて尋ねる。すると、美樹のお母さんはICUのほうへと目を向けた。

「詳しいことはわからないの。ただ、お医者さんが、美樹の容態が急変したって……。それで今、応急手当をしてる……」

「応急手当って……手術はできないんですか！」

「まだ美樹に体力が戻ってないから、手術は行えないって言うていたわ。今の美樹の体では、手術に耐えられないって……」

「そんな……」

俺は呆然としながら、ICUの扉を見る。

中を伺い見ることはできないが、今も美樹の治療が行われているのだろう。俺は引き寄せられるように、その扉へと近づいた。

すると、不意に扉が開く。そして、中から美樹を担当していた医師が姿を見せた。

すぐさま俺が駆け寄ると、医師は沈痛な面持ちで開いた扉のほう

を見る。

「……美樹さんが待っています」

「——え？」

それは、一体どういうことだろう？

俺は麻痺した頭で、とにかく美樹に会っていいんだって、そう思った。

ICUの中に入り、奥に進む。フラフラと、どこか危うげな足取りで。

「……美樹」

そして、美樹がいた。

診療台の上で、眠るように目を瞑っている。その周りには、治療を担当したであろう看護師達がいた。

「美樹」

もう一度呼びかける。すると、ゆっくりと美樹が目を開けた。

「……あ、修司、さん」

看護師に支えられながら、体を起こす。

そして、弱弱しく微笑む。

顔はいつもより白く、生気がない。少し痩せたようにも見える。部屋の隅では、心電図が不規則に小さな音を鳴らしていた。

「急いで、来てくれたんですね。嬉しいなあ……」

そう言って、場違いなほど嬉しそうに笑う。

俺には、それがとても遠くに見えて、一步美樹に近づいた。

「美樹っ！」

俺に遅れて、美樹のお母さんが入ってくる。だが、それに振り向くだけの余裕はなかった。俺はただ、美樹を見ることしかできない。

「あ、おかあ、さん」

囁くように言って、微笑む。その笑みに、美樹のお母さんは口元を抑えて膝を突いた。

「……先生、美樹は」

一番聞きたくないこと。美樹のお母さんは、それを担当の医師に尋ねた。

医師は、それに歯を食いしばって答える。

「手は、尽くしました」

それがどんな意味を持っているのか、俺の頭は理解しようとしな
い。

わかつているのに、ひたすら認めようとしなかった。

それでも、理解しないといけない。そして理解すると同時に、医
師に対して声を荒げていた。

「そんな！ アンタは医者だろ！？ なら、美樹を助けてくれよ！」
それが、理不尽な願いだとわかっている。この人達は、本気で手
を尽くした。でも、それでも、俺は何かに当たらなければ気が狂い
そうだった。

「修司君」

そんな俺を、美樹の声が優しく遮る。美樹を見れば、美樹は微笑
んでいた。

「そんなことを言ったら、駄目ですよ。先生達は、頑張ってくれた
んですから」

そう言って、美樹は長年担当したであろう医師に頭を下げる。

「先生。今まで、ありがとうございます。長い間、お世話になり
ました」

美樹の言葉に、医師は顔を伏せた。

「……すまない」

「あはは……謝らないでくださいよ」

最後だというのに、美樹は気遣うように医師と話す。次いで、美
樹は自分の母親へと顔を向けた。

「お母さん……ごめんなさい」

初めに告げたのは、謝罪。そして、申し訳なさそうに微笑む。

「わたし、親不孝者だね」

「そんなことっ……」

美樹の言葉に、美樹のお母さんは涙を滲ませながら首を振る。そして、優しく美樹を抱きしめた。

「そんなこと、ないわ。あなたは、私にとってかけがえのない、大事な娘だもの」

涙ながらにそう言つて、美樹のお母さんは顔を上げる。

「わたしこそ、ごめんなさい。美樹を健康な体で産めていたら……」

「もう、お母さんだったら。それは、何度も聞いたよ。そして、何度も言つたでしょ？ それは、お母さんのせいじゃないって」

いつも通りに、美樹は話す。

微笑みながら、ただ、何かに耐えるように、額に汗を浮かべて。

そんな美樹を見ていたら、

—— ああ、本当に、最後なんだな。

なんて、そんなことを考えてしまつて。

美樹は、必死にいつも通りにしようとしている。それが、痛いほどわかつてしまった。

美樹が俺に顔を向ける。それと同時に、美樹のお母さんが少し離れた。

「修司さん」

「なんだ？」

だから、俺にできることはただ一つ。

俺も、出来る限り、いつも通りに美樹と話すことだけ。

「一緒に、学校に通いたかったです」

「俺もだ」

「そして、一度で良いから『先輩』って呼んでみたかったな……」

「それは勘弁してほしいぞ。だけど、一度くらいなら呼ばれてみたかった」

俺と美樹は、顔を合わせて笑う。

でも、俺は上手く笑えていただろうか？

せめて、美樹が安心できるようにと、必死に笑顔を作る。

「一緒に学校に通って、昼休みは一緒にご飯を食べて、放課後は一緒に遊びに行つて……」

「それだと、俺はクラスの奴に冷やかされるな」

「嫌ですか？」

「いや、むしろ自慢してやるさ」

声が震えていないか、不安だった。

「自慢は、ちょっと恥ずかしいですね」

「そうかな？」

「そうですね。でも、わたしも自慢したかもしれません」

「ならお互い様だ」

美樹の手を握る。

「登下校は、手を繋いでおくのも良いですね」

「それはさすがに恥ずかしいぞ。やっぱり、こういうのは時と場所を選ぶから良いんじゃないか？」

「あはは、そうかもしれませんが」

握った手は、氷みたいに冷たくて。

「休日は、デートに出かけましょう」

「そうだな。じゃあ、いつもの場所でどうだ？ 俺が釣りを教えるぞ？」

「それじゃあデートにならないじゃないですか……でも、それも面白そうですね」

一緒に、笑い合う。

だけど、それは表面だけの笑いだった。

美樹がもう片方の手を伸ばし、俺の頬に触れてくる。

「泣かないで、ください」

触れられて気づいた。俺は、知らない間に涙を流していたらしい。「泣いてなんか、いないぞ。それに、美樹だって泣いてるじゃない

か」

そう言って、俺も美樹の頬に触れる。

「なら、一緒ですね」

「そうだな、一緒だ」

すると、美樹は傍にあったお守りを握りしめる。

「手術には、ご利益があつたんですね」

「今度、文句を言ってくるよ」

「駄目ですよ、そんなことをしたら」

「美樹がそう言うなら、止めとく」

なるべく笑う。だけど、涙は止まりそうになかった。

「ねえ、修司さん」

美樹は、どこかぼんやりとしながら、

「修司さんは、しっかり生きてくださいね」

いつか聞いた言葉を、もう一度口にした。

「……ああ、わかってる」

右手を、血が滲むほど強く握りしめる。

そんな俺を見た美樹は、安心したように微笑んだ。

「約束、ですよ？」

俺は美樹の右手を取って、自分の小指を絡める。

「約束、だ。これでいいだろ？」

「……はい。これで、安心です」

そう言っつて、美樹は目を瞑った。

「修司、さん。最後に、ワガママを……言っつていいですか？」

ゆっくりと、途切れそうな声で美樹が尋ねてくる。

「……なんだ？」

「この前の、病室での続き……修司さんから、してほしいな……」

少し、美樹が顎を上げた。それを見て、俺は涙混じりに苦笑する。
「そんなことでいいのなら」

「お願い、します」

肩を抱き寄せ、ゆつくりと口付ける。

時間にしてほんの数秒、俺は冷たい唇から自分の唇を離す。

「ふふ……ありがとう、ございました」

徐々に、美樹の体から力が抜けていく。

「貴方に会えて、本当に良かった」

最後に、微笑む。

そして、美樹の体から完全に力が抜けた。

お守りを握った手が、診療台から滑り落ちる。そして、それにつられるようにお守りが地面へと転がった。

心電図を見ていた一人が、声を出す。

「……バイタル、ゼロ。心拍、止まりました」

安らかな表情で眠る美樹を、優しく横たえる。

その顔は本当に穏やかで、

「う、うわああああああっ！」

そして俺は、生まれて初めて、大声を上げて泣いた。

エピローグ：夏のおわり

鳴く蝉も数を減らし、すでに秋が近づいていた。

俺は一人で元気に鳴いている蝉に耳を傾けながら、立ち並ぶ墓石の間を歩いていく。

そのまま歩き、ある墓石の前で立ち止まった。

墓石に刻まれたのは、『常盤家』の文字。そして、ここ最近新しく刻まれた文字を優しく撫でる。

「よう、美樹。また来たぞ」

そう言っ、出がけに買った花を供える。

以前美樹に贈ったものと同じ、薄い黄色に白。そして、ピンク色の花。

俺は墓石の傍にしゃがみこんで、線香に火を点けた。すると線香の煙が上がり、独特の香りが広がる。

あの手術以降、美樹の葬式が行われた。

美樹のお母さんは、悲しそうにしながらも気丈に振舞っていたし、俺もその傍で手伝っていた。

「美樹が笑顔で逝けたのは、貴方のおかげよ」

涙ながらに言われた言葉に、俺は返す言葉がない。ただ、頭を下げるだけだった。

「学校が始まってさ、よく周りの奴に『ずいぶんと変わった』って言われるんだ」

ははは、と小さく笑う。

「言われてさ、納得するんだよ。やっぱり、変わったのかって」
そう言っ、俺は自分の胸に手を当てる。

「なんか、ぽっかりと穴が空いた気がする。多分これ、お前のせいだぞ？」

美樹がいなくなっ、心は空虚になった。

「まったくさ、一人で先に逝くし、しかも、俺には『しっかり生き

る』なんて言い残しやがって……」

俺は、ポケットから『健康祈願』のお守りを取り出す。

「これのおかげで、俺は病気でそっちに行くことはなさそうだ。まったく、その分のご利益を、お前に回してくれればよかったのにな」
そう言つて、今度は『病氣平癒』のお守りを取り出す。

「まあ、病氣以外のものでも死ぬ気はないぞ。自殺なんてしないし、交通事故にも遭つてやらない。だから、しばらく待つていてくれ。それが、俺を残した罰だ」

本音を言つたならば、すぐに美樹に会いたかった。

後を追つて、なんてことも考えなかったわけじゃない。

それでも、美樹との約束が俺を止めた。

『もし、わたしが死んでしまつても、修司さんは……しっかり生きてくださいね』

まったく。死に際にまでそんなことを言われたら、守らなくちゃいけないじゃねえか。

俺はゆっくりと立ち上がる。

「だからさ、俺はしっかり生きてみようと思う。そうだな、いつそのこと、医者でも目指してみようか」

そう言つて、俺は青空を見上げた。

「こんな思いをする人が、一人でも減るように。ああ、それもいいな」

俺の言葉に、どこかで美樹が苦笑した気がした。

「心配すんなつて。それでも、勉強はできるほうなんだぞ。しかも、これからは頑張つて勉強するから、さらに良い成績を取れるさ」

俺は、花束から一本だけ花を抜き取る。

「あと、これ持つていくぞ。花を置きたい場所、もう一箇所あるんだ」

薄い黄色の花を手を持ち、俺は墓石に背を向けた。

「そんじゃ、また休みの日に来るよ。もしかしたら学校帰りに来るかもしれないけど、そのときは笑つて見逃してくれ」

ゆつくりと歩き出す。秋が近づいたとはいえ、まだ大分日差しは強い。

それならゆつくり行こうじゃないか。生憎と、俺にはたくさん時間がある。

あの場所に花を添えたら、久しぶりに考え事をするのもいいかもしれない。

なに、考えることだって大事だ。

それぐらいだったら、美樹も許してくれるだろう。

それがどこなのか、決まっている。

俺はゆつくり、ゆつくりと歩きながら、青空を見上げた。

さあ、行こう。

——あの、海風の吹く場所に。

F i n

エピローグ：夏のおわり（後書き）

どうも、作者の池崎数也です。

こんな駄文をここまで読んでいただき、まことにありがとうございます。少しでも楽しんでいただけたなら幸いです。

コンセプトは前向きなバッドエンド。ページ数はワードで60ページ前後と自分で決めて書いてみました。

おかげで話を詰め込みすぎた感じがします。

限られたページ数でどれくらい書けるかを試してみたかったです。が、このような形になりました。長編ではなく、中編くらいですかね？

美樹の病気に関してはインターネットで調べたものなので、おかしなところがあるかもしれません。

つつこみ、指摘、誤字脱字、感想など、よろしければお聞かせください。

それでは、ここまで読んでくださった方々に無上の感謝を。

IFストーリー：春風の吹く場所（前書き）

この話は、本編の5章から派生するハッピーエンドです。美樹の手術後が終了し、無事成功に終わったというIFストーリーになっています。いきなりエンディングです。もしもまだ本編を読んでいない場合は、良ければ読んでやってください。バッドエンドを見てからこちらを見ていただければ幸いです。

IFストーリー：春風の吹く場所

玄関で腰を下ろし、一ヶ月ほど前に買った黒いスポーツシューズを履く。

大分履き慣れたな、なんて考えながら、俺はゆっくりと靴紐を結んだ。

「それじゃあ、行ってきます」

家の中に向かってそう声をかけ、俺はドアノブを捻る。玄関の扉を開けると、僅かに冷えた空気が頬を撫でた。だが、冷えたようでその風はどこか暖かい。俺は少しばかり頬を緩めせると、左手に鞆を提げて歩き出す。

「今日は、良い天気になりそうだな」

天気は快晴。雲一つない青空を見上げて、俺はポツリと呟いた。

夏も過ぎ、秋が訪れ、冬を超えた。

そして今、今度は春の到来。近所の桜も花を咲かせ、道行く人々の表情もどこか晴れやかだ。

俺は欠伸を一つ噛み殺し、道行く人々の流れに流されていく。

今年で俺も三年生になるわけだが、それだけで俺自身が劇的に変わるわけでもない。

きつと校長辺りは、今日の始業式で『学校の最上級生としての自覚云々』などと壇上で熱弁を振るうだろうが、そんなものは知らない。

「なんでああいった話は長くなるんだろうか……」

どうでも良いことを呟きつつ、横断歩道を渡る。

周囲を見回してみれば、同じ学校の制服を着ている学生がちらほらといた。中には、午前中の入学式で入学してくる一年生が親らしき人物と一緒に歩いている。その表情は、これから始まる高校生活への期待で初々しくも輝いていた。

俺も二年前はあんな表情をしていたのか、なんて思い返してみる

が、どうにもあんな純な表情をしていた覚えがない。きっと、乾燥した表情をしていただろう。そんな昔の自分を思い出して、軽く苦笑した。

「すみません。ちょっとお尋ねしたいんですが……」

のんびりと周りを見ていた俺の背後から、不意にそんな声が響く。どこか親しげで、優しい声。

「常盤台高校へは、どう行けばいいのでしょうか？」

その声に、俺は小さく笑う。

「ああ、この道を右に曲がって、さらに右に曲がって真っ直ぐ進むんだ」

適当に指差しながら、俺は告げる。それを聞いて、背後の声は拗ねたような声を上げた。

「むー……それじゃあ、来た道を戻っちゃうじゃないですか」

「まあ、冗談だからな」

そう言って、俺は背後へと振り返る。

「おはよう、美樹」

挨拶をした俺は、きつと笑顔だっただろう。

あの夏、美樹の手術は成功した。

術後の経過もほぼ順調で、合併症などを引き起こすこともなかった。強いて挙げるとすれば、美樹の体力が完全に回復するのに時間がかかったくらいか。

ICUから一般の病室に移され、そこから日常生活を送れるだけの体力をつけるリハビリ。無理をしないように、それでいて懸命に頑張る美樹の努力が実って、彼女は今ここにいます。

——そう、今年度の新入生として。

元々一年留年していたが、手術の影響でさらにもう一年留年してしまった。

留年なので別に入学式に出なくても良いのだが、以前の入学式は体調が悪くて参加できなかったらしく、きちんとした形で入学式をしたらしい。

「そういえばおばさんはどうしたんだ？」

周りを見ても、いつも朗らかに微笑んでいる女性はいない。

「お母さんは一足先に入学式の会場に行ってます。良い席を取ってくる、と。ビデオカメラを手に持って、とても張り切っていました。」

「……運動会じゃないんだから」

俺はため息を吐く。入学式の最中に、カメラを撮影しながら美樹に手を振る姿が容易に頭に浮かんた。席は予めクラスごとで決まっている気がしないでもないが、気にしないことにする。

「それと……」

言葉を続けて、美樹は僅かに頬を染めて目を逸らす。

「『修司君にエスコートしてもらいなさい』って、お母さんが……」
僅かに小さくなった声と、赤くなった頬を見て俺も少し顔が赤くなるのを自覚した。

「まったく、あの人は」

愚痴を吐くように言ってみる。ことあるごとに俺と美樹をからかってくるのは、きつと楽しいからだろう。

……いやまあ、美樹のお母さんと親しいのは将来的な意味で良いことなんだろうけども。

俺がそんなことを考えていると、美樹は不安に曇った表情を向けてくる。

「あの、迷惑……でしたか？」

揺れる瞳と、少しばかり震える声色。俺は苦笑を浮かべた。

「そんなわけないだろ。ほら、ちゃんとエスコートしてやるさ」

ちよっただけ照れながらそう言っていると、美樹は花咲くような笑みを

浮かべる。

「はい！」

元気の良い返事に、周りの数人がこちらを見るが気にしない。美樹は満面の笑顔を浮かべて俺の横に並ぶ。

背中まで伸ばした黒い髪が春風に揺れ、鞆に結ばれた『病氣平癒』と書かれたお守りも小さく揺れた。

以前彼女自身が怠け者と称した心臓は、今ではとても頑張ってくれているらしい。お守りのご利益かはわからないが、近々参拝に行ってみようかと思う。

「あ、そういえば」

ぽん、と両手を合わせ、美樹が覗き込むように見てくる。

「ん？ どうしたんだ？」

俺が疑問の声をかけると、美樹ははにかむように微笑む。

「わたしの制服姿、どうですか？ おかしくないですか？」

上は白を基調とした制服に、下は紺色と緑色のチェックが特徴のスカート。

今までの二年間で見慣れた制服だが、美樹が着るとまた違った印象を受けた。

いつもはどちらかというところ綺麗な、という印象なのだが、制服を着た美樹は可愛い印象を受ける。

「うん。可愛いな」

ぼろっと、直球で本音が漏れた。

思わず口を閉じるが既に遅い。美樹はさつきよりも顔を桜色に染めて下を向いていた。それを見た俺は、気恥ずかしくて横を向く。

「そ、その、ありがとうございます……修司先輩」

そして、美樹の突然の先輩発言に、俺は危うく噴き出すところだった。

何を、と尋ねようとしたが、数ヶ月前の病室での会話が頭を掠める。

『そうになったら、俺の後輩になるんだけどな』

『そ、それは言わないでくださいよ』

『あ、だったら先輩って呼んだほうが良いですか？』

『……いや、今のままでいい』

何気ない会話だった。

そして、それは叶わない願いだとも思った。

しかし、それが今では俺の横に美樹が並び、そして笑っている。

「……先輩、か。覚えてたんだな」

「はい。もし、もう一度学校に通うことができたら、そう呼んで困らせてあげたいって思ってた」

そう言っただけに笑う美樹。その笑顔を見て、俺は嗚呼と息を吐いた。

「困った……」

「え？ どうしたんですか？」

いや、これは困ったな。

「なんとというか……幸せで困ってる」

心が満たされる充足感。

隣に美樹が歩いているという幸せを、今更ながら実感する。

運が悪ければ、今ここに美樹はいなかっただろう。こんな晴れやかな気持ちで通学路を歩くこともなく、以前にもまして無気力な生活を送っていたかもしれない。

そんな俺の表情を見た美樹も、幸せそうに笑った。

「わたしは、幸せで困ったりしませんよ？ だから、もっと幸せにしてほしいなー、なんて思っちゃいます」

美樹がはにかむ。俺は足を止めて、美樹と向かい合った。

「俺は、今のままでも十分幸せだ。でも、そうだな。美樹がそう言うのなら……」

二人の間を春風が吹き抜ける。俺はその風に押されるように口を開いた。

「これから、もっと幸せにしてやるさ」

風に乗って、言葉が流れる。

美樹は僅かにうつむき、ややあつて顔を上げた。

——その顔に、満面の笑みを浮かべて。

「はい……お願いします」

満面の笑みに、俺も笑顔を返す。

「さて、それじゃあまずは入学式だな」

右手を差し出すと、美樹は笑顔のまま手を繋ぐ。

その暖かさに、俺は内心でもう一度だけ嗚呼、と呟いた。

幸せにする時間はいくらでもある。

幸せになる時間はいくらでもある。

それが、ひどく嬉しい。

そんな俺の様子を見て取った美樹が、僅かに手を引っ張った。

「ほら、早く行かないと遅刻しちやいます。わたし、入学式を遅刻なんて嫌ですからね？」

手を引く美樹に、俺は負けじと歩調を速める。

あの海風の吹く場所で美樹と出会えたことに、俺は感謝したい。

「修司さん」

先に行く美樹が僅かに振り返る。

「わたし、今とっても幸せです！」

そんな美樹に、俺も声を上げた。

「俺もだよ！」

そうして二人で笑い合う。

響いた笑い声は、雲一つない青空へと吸い込まれていった。

IFストーリー：春風の吹く場所（後書き）

どうもお久しぶりです。池崎数也です。

本編はバッドエンドで終わった『海風の吹く場所』ですが、つい勢いでハッピーエンドバージョンも書いてしまいました。

感想でリクエストをいただいたというのがありますが、やっぱり美樹には幸せになってほしいという思いがありましたので。

IFストーリーみたいなものですが、少しでも美樹が幸せになったように見えれば幸いです。

何か微妙に甘ったるい気がします、気にしないようにしたいと思います。

では、こんな拙作を読んでくださった方に無上の感謝を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3097e/>

海風の吹く場所

2010年10月8日13時18分発行